改訂 帝國讀本

巻四

375.9
Ha7
資料室

41714
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
2051

資料室
375.9
Ha7

大正七年十二月十六日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

改訂 帝國讀本

東京 合資會社 冨山房發兌

廣島大學 教 38323 藏

改訂 帝國讀本 卷四目次

一 明治天皇の御製 其の一（韻文）……一
二 明治天皇の御製 其の二（口語文）……三
三 岩倉右府 其の一……八
四 岩倉右府 其の二……一四
五 月光と古人 其の一（口語文）……一八
六 月光と古人 其の二（口語文）……二二
七 奈良の旅（書簡文）……二五
八 晩秋……三三
九 讀書……三七

一〇　刀劍の崇拜（口語文）……四二
一一　川中島（韻文）……四八
一二　人の香（書簡文）……五三
一三　樂地……五七
一四　歳の暮……六一
一五　雪（口語文）……六四
一六　死中再生（口語文）……六八
一七　海軍戰死者ヲ祭ル……七七
一八　旅順の戰跡（口語文）……七九
一九　伊達政宗　其の一……八六
二〇　伊達政宗　其の二……九二
二一　伊達政宗　其の三……九七
二二　丈夫の吟（韻文）……一〇三
二三　簡易生活（口語文）……一〇六
二四　我が家の富……一一四
二五　冬枯の大井川（口語文）……一一八
二六　春を待ちつゝ（書簡文）……一二四
二七　幕末論　其の一……一三〇
二八　幕末論　其の二……一三五
二九　日本の三景……一三九
三〇　國語と國文……一四二

自讀文

一　我が幼時……一四九

二　太宰府詣……一五三
三　鍵の國と障子の國（口語文）……一五六
四　乃木將軍旅順攻（韻文）……一六〇
五　其の時のことばさ加減（口語文）……一六三
六　西郷南洲遺訓……一六六

卷四目次終

廣島大學圖書之印

改訂帝國讀本卷四

一　明治天皇の御製　其の一

四方の海みなはらからと思ふ世に
　など波風の立ちさわぐらん

橿原のとほつ御祖の宮ばしら
　建てそめしより國は動かず

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

我が民草の上はいかにと
子等はみな軍のにはに出ではてゝ
翁やひとり山田もるらん
世とともに語りつたへよ國のため
命を捨てし人の功は
さし上る朝日のごとくさわやかに
持たまほしきは心なりけり
我が心いたらぬ隈もなくもがな
此の世を照す月のごとくに

おもほえず夜をふかしけり國のため
たふれし人のものがたりして
白露のおきふしごとに思ふかな
民の草葉のさかゆかん代を
おのが身を修むる道は學ばなん
賤がなりはひ暇なくとも

二　明治天皇の御製　其の二

明治天皇の御製が、二十萬首もお有りなさるとい

ふことは、あらゆる點に於て、東西古今の君主を凌駕し給ふ御事績の一つとして、驚歎し奉るより外は無い。大天皇のすべての鴻業が神業である如く、之も一つの神業である。古來最多作の歌人と言はれた家隆(一)卿さへ、天皇に比べ奉れば、物の數でも無い。歷代の勅撰(二)二十一代集の歌の數が總計三萬數千首、其の幾倍の數を御一人で御つくり上げになつたのは、眞に人間業では無い。かばかり多數の御製が、最も多事な明治の御治世に於て、萬機親裁の餘に成つたことを考へ奉れば、其の御精力の絶倫であらせられたこと、何時の世、何所の國にも類例は無い。皇威を四海に輝かし、皇國を世界一等國の班にお進め遊ばした大業と共に、言の葉の道に於ても、空前の偉績をお示しになつたことは、億兆の欽仰し奉るところ、千代萬代かけての語草である。

御精力の絶倫にあらせられたことは言

神業

(一)藤原家隆。歌人。嘉禎三年(一八九七)歿。年八十。

(二)古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新勅撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今。

精力絶倫

父帝の天とふことを
よみおかせ給へるを
あさみどりすみわたりたる
おほぞらのひろきをおのが
こゝろともがな

聰子內親王
謹みてしるす

欽仰

明治天皇御製（聰子內親王御筆）

ふまでも無いが、かばかり多數の御作のあつたことは、平素何等の娯樂をも近づけ給はず、酷暑嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出なく、常に宮中におはして、唯一の御慰となされたのが即ち和歌であつたからである。之を思へば、實に恐多いことで、且又其の神々しい御性格を窺ひ奉ることが出來る。御製を拜誦し奉る者は、一言一句、これが即ち萬機親裁の餘、御くつろぎ遊ばされた御日常の御慰安であつたといふことを拜察しなければならぬ。

くつろぐ

風調

日常の御慰安の爲にお詠み遊ばされた數々の御詠、其の風調は高く、規模は大きく、如何にも萬世一系の帝祚を踐ませたまふ上御一人の御作とうかゞはれる。國をおもひ、民をあはれませ給ふ大御心は、常に御製の上にあらはれて居る。一首の歌が、米國大統領(一)ルーズヴェルト氏を動かして、講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の和歌が、千萬の兵馬にもすぐれた力を示したもので、和歌始つて以來、未曾有の事である。まして七千萬の國民が日常拜誦して、自然に蒙る偉大な感化に於ては、何等の經典も之に並ぶものは無い。日々の御慰が直ちに國民教化の源泉となる、これ程の貴さが、何時の世、何所の國にあらうか。

上御一人

(一) Roosevelt.

動機

經典

森嚴雄大
典範
玉の御聲
草莽の微臣

明治時代の詔勅は森嚴雄大、ながく國史を照して、後世の國民に聖代を語り、典範を示すのである。併し詔勅にはそれ〴〵の形式があり、聖意を承けて起草する人のあることも明白である。御製は直ちに大御心の發したもので、之を拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽する光榮を有することは、實に我が國民の特殊な幸福である。

三　岩倉右府　其の一

井上　毅

維新の初に、「神武の古に復る」といへる大義を定め

(一)岩倉具視。明治十六年歿。年五十九。
輔翼
碩學
(二)石見國津和野藩士。明治四年歿。年八十。
御覺めでたし
(三)南朝の忠臣。正平九年(一三〇一四)歿。
(四)醍醐天皇の年號。
(五)村上天皇の年號。
隙を生ず
有職
達觀す

られしは、故右府公の輔翼の力にぞある。碩學野々口(二)隆正氏の說に、「建武中興の振はざりしは、當時の搢紳に其の人なかりしによれり。源親房卿(三)は學識ありて、時の帝の御覺もめでたかりしかど、其の人の所見は延喜(四)、天曆(五)の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ公家、武家の間に隙を生ぜしなれ」といへり。

故右府公は搢紳有職の家に生立ちたまひしかど、夙に大勢を達觀して、王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために、「神武の古に復る」といへる一大義を唱へたまへるは、これぞ明治の朝廷に

百揆
盤根錯節
破竹の勢

(一)聖武天皇の年號。

譴を蒙る

(二)京都上賀茂の東北。

蟄居

(三)京都の勤王家。野々口隆正の門人。明治五年歿。年六十三。

人ありとは申すべき。此の一大義は百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節をば、すべて破竹の勢を以て破りたり。世の人は明治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知るならん。

徳川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて久しき間岩倉村に蟄居し、天日をも見たまはざりしが、俄に召によりて夜中參内し給ひけり。此のをり公は一つの大嚢を携へて宮門を入り給ひしが、嚢中の文書は、皆公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。此の時大勢尚定まらずして、物論紛々たりしに、公は俄に躬を以て責に當り、從容應答して、雄藩の主も爲に容を改め、朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は攝關、議奏、傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべからざる基礎を建てられたるは、實に公の輔翼の力なり。「就中、復古の第三日に、禁闕に達文を掲げられて、女房の請謁を納るゝ事

禁闕
請謁

岩倉具視

をいたく禁止せられたるは、これぞ積年の宿弊を除き、將來のために一大美事を遺されしなる」とて、公の晩年に親しく物語し給ひき。此の一事は扇の要なりとは知る人ぞ知らん。

長袖の人

剛膽は政治家の第一要德なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覺えぬばかりに、剛毅の德を備へおはしけり。「征韓の議、今にも蕭墻の內に變亂を見んとする時、陸軍將校の中にて勇武の聞えある一人は公の邸に參り、客室にて謁見し、一應二應議論の末、其の人怒れる眼血を濺ぎ、毛髮倒に豎ち、脇差を左の手にて鞘もたわむばかりに握りつめ、『貴殿もし意見を枉げ給

(一)明治六年朝鮮の無禮を膺懲せんとせし論。

蕭墻の內に變亂を見る

はずば、御身の爲に惡しかりなん。』と言放ちつゝ、膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時公の家の侍ども、次の間に控へ居て、障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公はすこしも動ずる色なく、自若として其の座を守り給ひき。」とぞ內の人の物語りし。

あはや

自若として

公の、畏きあたりの御覺殊にめでたかりしは、世の人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我をおきて人はあらじと、思ひたまへる隱さはぬ明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか。雲の上の事は筆に載するも畏ければ洩しぬ。

君臣水魚

雲の上

(一)「大君の御門の守り我をおきてまた人はあらじ。」(萬葉集、大伴家持)

(二)「君の御代御代隱さはぬ明き心を皇邊に極め盡して。」(萬葉集、大伴家持)

國是

台鼎の高き位

公達

四　岩倉右府　其の二

公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて、宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺制の尊きことを世に知らせん爲のはからひとぞ聞えし。公は勤儉の二字を大政の本として、輔弼に心を盡させ給ひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、「岩倉村の蟄居の時をな忘れそ。」とて、常に公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、「後の世まで守り文にせよ。」とて、子孫に遺し給ひ

しが、其の附錄一篇は、專ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にましく、つゝ、親しく旨を授けて、さむらふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際の遺言にも、「己の墓石は父君の墓石の寸法に準へよ。」とありきとなん。

公は日に夜に、公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。朝五時前には目を覺し、「侍やある。」と聲かけさせ給ひ、「今日は何某をば何時に召せ。次に何某をば何時に呼べ。又明日は何某に何時に來れ。何某に夕何時に參れ」と記して申し遣はせ。」など

あらざらん後の世の心盡し

仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文かく事に忙しかりきとなん。公の病に侵され給ひつるは明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より何となくあらざらん後の世の心盡しの節々を、知る人に語らせ給ひし事ぞ多かりける。同年の冬、或人の許へ贈り給へる書の末に、

さりともとかきやる浦の藻鹽草
誰が下りたちてかづきあぐらん

とぞありし。先だつも後るゝも世の習とはいひながら、御國の爲に行末を思ひやられし公の心こそいとあはれなれ。

節操を二つにす
晩節を全くす

家子

公の平生の仰に、「大臣たるものは、其の身の進退によりて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなる。われこそ躬を以て人臣の標準を示さめ。」とのたまひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げんことを思ひ立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽入れず、「是非に。」とて歎き請ひ給ひしかば、上には忝くも誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞屆けさせ、厚き惠の御勅をさへ下し給ひけり。かくと承りて、公はさしもに重き衾を押退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、急ぎ家子等をめし集へられ、「今日こそは病の輕きを

覺えたれ。それ盃まゐれ」とて酒を賜ひけり。人々歡の色をなしたりけるが、さて其の翌日に事重らせたまひぬるぞかひ無き。今はの際まで、夢幻の間にも公の事のみ心に懸けさせたまひ、無からん後の事までも、人もて雲の上に聞え上げまゐらせしこともありきとなん。

—梧陰存稿—

五　月光と古人　其の一

一　菅公

むかし顯基(一)中納言といふ人は、「罪なくて配所の月を見ばや。」といつた。月夜の玲瓏隈なき光は、俯仰天地に愧ぢることの無い心を以て眺めてこそ、肝膽相照す友である。眺められる月に一點の曇も無く、眺める我が心に一塵の汚も無いうるはしさ。良心の眞澄の鏡は即ち皎然たる月の光に外ならぬ。

心靜に月を見て、靜に月を樂しむ人は、世に一人の友もなく一介の同情者なくとも、誠に天地の廣い人である。天地に愧ぢない人である。

罪が無くて配所の月を見た人は、古の菅(一)原道眞であつたらう。

海ならずたゞよふ水の底までも
清き心は月ぞてらさん

(一)源顯基。後一條天皇に仕ふ。永承二年(一七〇七)歿。

配所　俯仰天地に愧ぢず

肝膽相照す

眞澄の鏡

一介

(一)延喜三年(一五六三)歿。年五十九。

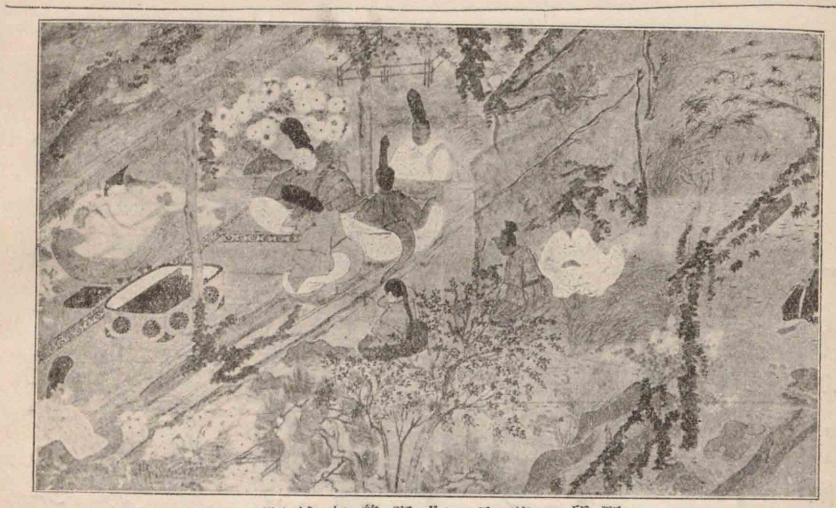
清朗明徹

皎潔

の一吟を味つて見れば、公の心は清朗明徹である。何の犯した罪も無いのに、右大臣の高官から落されて、大勢の子供も散り〳〵ばらく、稍老境に入つた身を以て、筑紫の果に棄てられた當時の公の境遇には、何人も深く同情しなければならぬ。公の行はあまりに月の様に明白であつた。公の心はあまりに月の様に皎潔であつた。公が秋月に問ふといふ詩には、「爲問未曾告終始。被掩浮雲向西流。」とある。公の左遷は公の光明を嫉んだ浮雲の所爲である事は、昔も今も知らぬ人は無い。公が月に代つて答へる詩に、「天迴玄鑒雲將霽。唯是西行不左遷。」と自ら慰めて居るのや、秋夜の

光風霽月

(一)延喜元年。



配所の菅公（北野縁起繪詞）

詩に「月光似鏡明無罪。」とあるのを見ては、公の心は光風霽月、何等一點の疚しい所が無いのが分る。九月十日の夜、月影清く、蟲の音涼しい配所の秋には、前年の御遊をおもひ出して、

去年今夜侍清涼。
秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此。
捧持毎日拜餘香。

と口吟せられた。かつては九重の雲井の上に見た月を、今は配所の月とながめられた公の心事は察するに餘りあるが、公の樣な僞の無い心を以てこそ、月に對しての問答も出來るのである。公が配所の慰藉は梅よりも、菊よりも、家鄕の書信よりも、恐らくは心づくしの月影であつたらうと思ふ。

なか〳〵に心づくしの浮雲も
　　光を添ふる有明の月　　本居春庭(一)

口吟
慰藉
心づくしの月影

(一)德川時代の國學者。本居宣長の子。文政十一年（二四八八）歿。年六十六。

六　月光と古人　其の二

二　安倍仲麿(一)

(二)元正天皇の時の人。靈龜三年遣唐使となりて支那へ赴き、我が寶龜元年（一四三〇）彼の地に歿す。年七十。

都の月、筑紫の月、同じ人も見る境遇によつて其の感は樣々である。菅公の胸中人を怨みる心なく、世を憤る心もなかつたが、おもひ一たび故鄕の親しい人人の上に及んでは、堪へがたい悲哀の念も湧いたであらう。況や天涯萬里、波の外なる外國にあつて故山を思ふほど、切實な感慨はない。月は同じ天邊の月である。我が思ふ人も、我を思ふ人も、ひとしく同一の月を眺めるのである。月の光は同じいけれど、月の照す風物は同一ではない。むかし安倍仲麿が唐土にあつて歸國しようとした時、

あをうな原ふりさけ見れば春日なる

天涯萬里
切實
あをうな原

三笠の山に出でし月かも

の詠歌には、王維(一)、李白(二)の徒までが泣いたといふ。當時の交通は今日のやうに容易ではない。遣唐使の乘る船は三船といつて、三つの船を出した。これは海上の危險が多いから、萬一を慮つたのである。遣唐使の船出は、萬死に一生を覺悟したうへである。難破して海底の藻屑となつた人も度々あつた。此の危險を冒して海外に行つたのも、當時の支那の文明を日本に輸入しようといふ熱心の爲であつた。仲麿は靈龜二年船出して、暴風に逢つて安南(三)近傍へ押流され、それから更に支那に入つたが、遂に日本へ歸航する機會を

(一)支那唐の詩人。字は摩詰。(一三五九—一四一九)
(二)支那唐の大詩人。字は太白。(一三六一—一四二二)
萬死に一生　海底の藻屑
(三)印度支那東部の國。

故山　青によし

失つて、彼の地で死んでしまつた。かの三笠山の歌を思へば、どの位、一度故山の景色が見たかつたであらう。「長安一片月。萬戸擣衣聲」此の夜景を見る毎に、想は常に繪のやうな青によし奈良の都に飛んで居つたのであらう。李白が仲麿を哭する詩、

日本晁卿辭帝都。　征帆一片繞蓬壺。
明月不歸沈碧海。　白雲秋色滿蒼梧。

七　奈良の旅

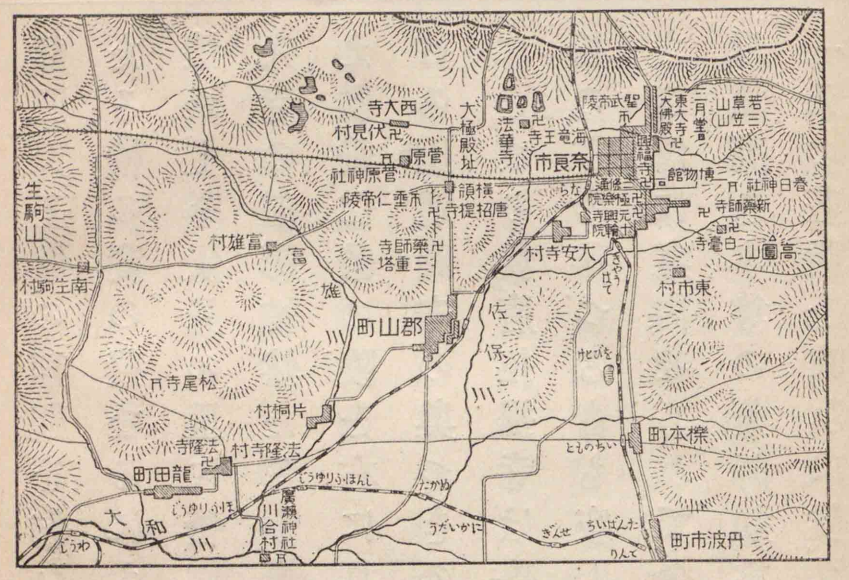
佐々木信綱

四日、朝とく車を驅りて三條通を生駒山に向ひて進み候。今日は昨日とかはりて空拭ふが如く、秋晴の

大和路心地よき限りに候。聖武帝の陵を道の右に拜して、佐保川を渡り候。佐保、佐紀の山は右の方に起伏して、春の花、秋の鹿、昔ゆかしき心地致候。道のほとり、小川の堤には鈎鐘草、野菊花咲きて、うばらの實こぼれ、秋色今をさかりに候。

法華寺に至り、若き尼の案内にて、靜なる本堂に奈良朝木彫の逸品たる本尊十一面觀音像を拜し候。千餘年の星霜に貴く物さびて、木地の色も淡黑きに、慈悲の御目ざし生けるが如き御姿尊く拜し候。

海龍王寺の門を入るに、百舌の聲頻りに聞え候。顧れば興福寺の塔、大佛殿の屋根、木の間に高く聳え、眺



言ひしらず候。數町にして道の左なる田野の中に大極殿の遺址これあり候。そのかみの礎石を殘せる芝生に立ちて、青丹よし奈良の都の壯觀を忍べば、懷古の感に堪へず候。草の葉隱れに黃なる花、白き花咲きて、蟋蟀の音もあはれに聞え候。

次に訪ひしは西大寺に

孤影悄然

候。四天王像の拜觀を乞ひて臺所に入れば、箕に盛りたる柚の實の黄なるにも秋の色深く相見え候。名も懷かしき伏見の里に菅原神社に詣で、畑中の古堂喜光寺の孤影悄然たるを見ては、一入のあはれさを覺え候。垂仁帝の陵を右に拜して過ぐるに、池中に島なせる田道間守の奥つきのあたり、鴨數多遊べるが眼にとまり候。唐招提寺は甍の上の鴟尾に日影耀きて、松の雫の落つる音も寂しく聞き候。栗皮色の袈裟着たる僧に案内せられて、金堂、講堂を見候。藥師寺にては、氣高き本尊の藥師如來並びに雄麗なる三重塔に、一入の莊嚴を味ひ申候。又佛足石の歌碑は、奈良時代の和歌の、物に彫られて現存せる唯一のものなれば、殊に目にとまり候。

郡山より汽車に乘りて法隆寺に到り候。金堂、講堂をはじめ、綱封藏、五層塔など見めぐり候。今更にいふまでも無き貴重なる古美術の中にも、寂たる步廊の石だたみを踏んで千餘年前の壁畫に對したる時の感、殊に忘れ難く候。

步廊

法隆寺を辭して機織れる家多き村を過ぎ、から棹の音を聞きつゝ、とみのを川を渡り、更に又大和川を渡り、廣瀨神社に詣で候。大演習行幸の前とて、頻りに道を直しをり候にも、此の大和國原に武をみそなはす

みそなはす

天がけり

とある

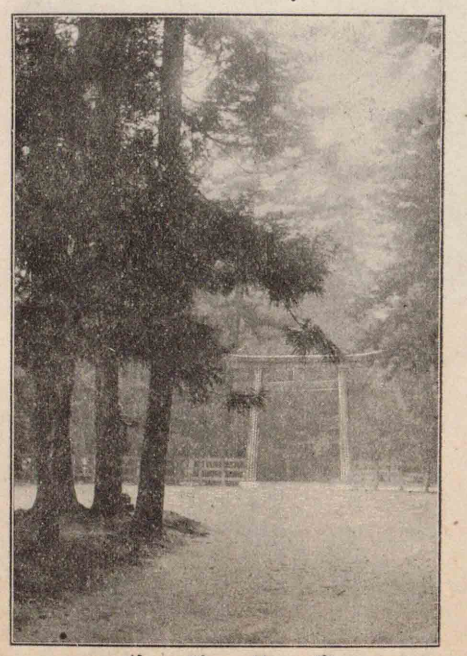
す今年の秋を、皇祖の靈も天がけり喜ばせ給ふらんと畏く覺え候。再び汽車に投じて、夕ぐれ奈良に着き候。夜月明、杉の木立をわけて此處彼處と歩めば、我が身そゞろに昔の人になりぬる心地いたし、感興いはん方無く候ひき。

明くれば五日、また雨にて候。極樂院、元興寺、十輪院等を見めぐり候。高畠のあたり雨烈しく、とある家の崩れたる築地に蔦纏へる門内、ぬるでの梢の紅葉せる蔭に暫し雨宿り致候。やがて新藥師寺を訪ひ候茶の衣に木蘭の腰衣着けし老尼、物うげに案内致しくれ候。十二神將の像は幾度見ても飽かず候。門を出づ

けぶる

れば薄、野菊雨に亂れ、畑を隔てゝ彼方に高圓山聳え、其の中腹なる白毫寺の塔けぶり居候。

鹿の群れ遊ぶ神苑を過ぎ、春日神社に詣でて巫女が梅が枝を舞ふを見候。いつ見てものどけくみやびやかなるに、夢見るごとき心地致候。



春日神社

雨霽れて冬枯の色寂しき若草山のもとを經て三月堂に至り、此處に天平美術の精髄ともいふべき諸佛像を見候。秘佛と崇

められたる執金剛の雄健壯麗なるは、殊にすぐれて覺え候。

執金剛像
（東大寺三月堂藏）

大佛殿の鐘樓に例の鐘をつき試み、修繕中の大佛殿に詣で、さて博物館を見候。陳列の品々いづれ優秀にして貴重ならざるもの無く、げに我が國古美術の粹を萃めたるものと申すべく候。

博物館を出でて、こゝに此の度の大和めぐりを了へ候。樹蔭に憩ひて暫し我が奈良朝の文明を憶ひ、一轉してわが萬葉集に想ひ到り、かくの如き大和の自然を舞臺とし、當時の國民精神を如實に傳へたる我が萬葉集の意義と價値との返すゞ大なるものあるを感じ候。

—文と筆—

八　晩秋

一　野路

野路行けば粟の收納の盛にて、稻の收納もぼつぼ

德富蘆花

彌繁りに繁る

つ始りぬ。蕎麥の花雪の如く、甘藷の畑は彌繁りに繁れり。百舌鳴く村に、紅なる、黄なる、星の如く柿の實の照れるを見よ。

彼岸花、螢草、野菊、蓼、小さき粟の如く、稻の如く、黍の如く、燕麥の如き八千草に鳴く蟲の音を踏分け行けば、蛙飛び、螽斯飛び、稀には蟹がさ〳〵と隱れ行く。

月影こぼる

二　月を帶ぶる白菊

墨繪の如き樹影を浴びて、獨り中庭の夜に立てば、月を帶ぶる白菊ほのかに薫りて、花の月と囁く聲も聞えぬべき心地す。俯きて其の一枝を折らんとするに、しとどに露にぬれたり。折れば月影ほろ〳〵とこぼれぬ。

檐滴

村瘠せたり

朝來の雨止み、風息み、月夜の靜味言盡し難し。何に動かされてか、井戸端の無花果の葉のがさりといひしあとは、一庭寂然として月と影と共に眠りぬ。唯稀に稀に、檐滴の蔭闇き方に私語するのみ。

三　秋郊

柿の落葉を踏みて後山に登る。黄茅蕭々として亂れ、龍膽の碧、棗實の紅と徑を綴る。山上より見れば田は盡く刈られ、麥の綠なほほのかにして、村も瘠せたり。晩秋の野いたく寂びぬ。

烏五六羽あり、山上の樹より立ち、鳴きつれて彼方

の村に向ふ。啞々の聲滿山に響く。

四　富士雪を帶ぶ

富士雪を帶ぶ。さやかに雪を帶ぶ。秋空何ぞ高き。風威を帶ぶる相模灘の怒號何ぞ壯なる。此の空と此の海との間に、玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。絶頂より五合目のあたりまで、銀よりも白き雪は桔梗色の山膚を被ひて、上は隈なく、下はさながら笹緣とれる樣に山を包む。雪色淨うして點塵なく日光に輝きて、水よりも澄める晩秋の空に高し。豆相の連山を蹈み、萬波雪の如く立騷ぐ相模灘を俯瞰して、秀麗、皎潔、神威十倍するを覺ゆ。

水よりも澄める空

嶽頂の雪、實に富士の秀色神采を十倍せしむるのみならず、更に裾野の大景に眼睛を點ず。東海の景は富士によりて生ず、富士は雪によりて生く。

——自然と人生——

眼睛を點ず

九　讀書

坪内逍遙

常に良き著書に親しむものは、唯獨り居れども寂しきことを覺えず。師を求めざれども日に月に學ぶ所あり。失意にも慰み、不平憂悶も之を忘る。「書は少年の滋味にして、老年の娛樂なり。順境には心の飾とも なり、逆境には庇護と慰安とを與ふ。外に出でたる時

順境逆境
庇護

も邪魔とはならず。家に在れば心を樂しましむ。夜の伴、旅の伴、僻地の伴。」と、羅馬の名士キケロ(一)の言ひしも同じ心なり。されど、かくの如きは、吾人が讀書より受くる最大の利益にはあらず。

諺に「百聞、一見に如かず。」といへるは、何事も其の身親しく經驗するに如かずといふ意味なれど、人の壽命限りあれば、七十、八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは、幾何もあるべからず。我が日本國内の山水、風俗だけにても、一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大いなるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一身の經驗の狹く、淺く、小さく、且少かるべきは、

(一) Cicero. 羅馬の政治家。(西曆紀元前一〇六―同四三)

思索

言ふにも及ばぬことなり。されば、こそ、今も昔も、苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を觀んと欲する人々は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て、之に親しまんことを願ふなれ。いはゆる名著は、人間世界開けて此のかた、凡三千年間に出でたる大賢、高德、碩學、大才の經驗、觀察、思索、想像を、其のまゝに、又はランビキにかけて備へたるものなり。或は顯微鏡、望遠鏡に譬ふるも可なり。素より人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微なる物をも、遠く且大いなる物をも看取するを得しむ。後れて生れたる

者にして良書の助を借ることなく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も、人間界の事も、僅かに一斑を窺ふに過ぎざるべく、其の一斑すらも、正しく明らかには看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、かねて智を研く砥石なり。しかしながら、讀書の要は尚これに盡きたるにはあらず。

一斑を窺ふ

伊太利の詩人ペトラルカ(一)は曰く、「予に良友あり。彼等は皆名士大家にして、いづれも偉業をなしたる者なり。予若し其の助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る。」と。これ良書が常に其の讀者を啓發し、指導し、皷舞し、奬勵する力あるをいへるなり。北米の

(一) Petrarca.（西暦一三〇四—一三七四）

名士チャンニング(一)も曰く、「吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、主として書籍の媒介に因る。而してかゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑吾人に向ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人の爲に吐露す。」と。英國の詩人ミルトン(二)も亦曰く、「良書は保存して後世に備へられたる俊傑が貴重なる生血なり。」と。

俊傑

吐露

(一) Channing.（西暦一七八〇—一八四二）

(二) Milton.（西暦一六〇八—一六七四）

人は良書に親しみて、先づ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大いなるに驚き、或は品性の高きに感じ、「嗚呼同じく人といふ、高く、清く、美しく、

私淑

偉なること、かくの如きものあるか。」と歎ずるなり。若しかりそめにも、其の偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、これに倣はんとする志を生じ、日に、月に力め行ふに至りなば、書の用極れるにちかしといふべし。

—中學修身訓—

一〇　刀劍の崇拜

日本人が刀劍を尊ぶのは古來の事であつて、畏くも草薙劍は三種の神器の一として崇められてをり、正眞の御劍は熱田神宮に齋き奉つてある。神武天皇は布都の御劍を以て、賊を御平定になつた。此の御劍

瘴癘の氣

は今は官幣大社石上神宮の神體である。日本武尊が御劍をお忘れになつた爲に、瘴癘の氣にお中りになつた傳說を見ても、上代からの尊崇の度が分る。劍の威德を述べたものには、源平盛衰記や太平記の樣な昔の軍物語の前について居る劍の卷といふものがあつて、源家重代の二口の劍、髭切、膝丸の由來と、其の折々の功名を語つてゐる。此の二劍が、鬼切、蜘蛛切となつたのは、一は渡邊綱が鬼を切つたのにより、一は賴光が蜘蛛を切つたのによる。これが又爲義の代に聲を出して鳴いたので、獅子の子、吼丸と改名したが、後に吼丸は聟引出に遣はし、更に小烏丸を作つた。此

聟引出

の小烏丸は少し獅子の子より長かつたが、いつか短く切れて、獅子の子と同じになつた。これは獅子の子が切つたのであるとて、獅子の子を友切丸と改名した。此の友切といふ名が崇つて、源氏は骨肉相殺すに至つたとの事で、友切を本の名の髭切に改めた。これを帶して頼朝は遂に平家を亡したのである。小烏は長田忠致が義朝を殺して後平家に上つたので、平家の重寶となつた。

さて又吼丸は聟引出として一旦熊野の別當教眞の手に渡り、熊野權現に納められたが、後義經の手に歸し、義經は之を帶して平氏追討の大切を立てたの

である。これを義經が頼朝と不和になつてから、薄緣劍といつて箱根權現に納めた。これ義經が運の盡であつたが、曾我兄弟は後に此の劍即ち昔の膝丸を得て、親の敵工藤祐經を討取ることが出來た。さて其の劍は再び頼朝の手に歸つたといふのである。之を以て見ると、源家の興隆は全く此の二劍の威德により、義經や曾我兄弟の運命も、すべて劍の有無によつて定まつたのである。か程に劍を重視した所に、刀を尊んだ精神が見られる。

平家方の小烏、抜丸の由來も、源平盛衰記に見えてゐる。抜丸はひとりで抜出て大蛇を斬つたからの名

節刀

である。平家物語の青侍夢物語に、八幡大菩薩は平家の節刀を賴朝に賜ふと仰せられ、春日大明神は其の後それを我が子孫に賜へと仰せられたとある。それと同時に清盛の護刀が紛失したといふのも、刀劍の所在が即ち兵權の所在を示すのである。後世の武人が刀劍を武士の魂と考へたのも、其の由來は久しいことである。

武人の武具は刀劍ばかりでは無い。平家の唐衣の鎧についても長い話があり、源家重代の鎧については、保元の亂に源爲義が、

「過ぐる夜の夢に、重代相傳はりて候月かず、日かず、源太がうぶぎぬ、八りう、おもだか、うすがね、たてなし、ひざ丸と申して八領の鎧候が、辻風に吹れて、四方へ散ると見て侍る間、かたぐ〳〵憚り存候。まげて今度の大將をば餘人に仰せつけられ候へ。」

と言つたのを見ても、之を尊重したことが分る。

劍工も鎌倉時代に名高い正宗を始として、古刀、新刀の數々、鍛冶工は精神を凝して之を作つたことは、種々の傳說小說に數多いことである。刀劍鍛練術の發達は、やがて刀劍尊崇の反映と見るべき事である。武家時代には、支那へも多く輸出したものらしい。歐陽修が「寶刀近出日本國。越賈得之滄海東。」と歌つたの

反映

(一)支那宋代の詩文人。(一六六七―一七三二)

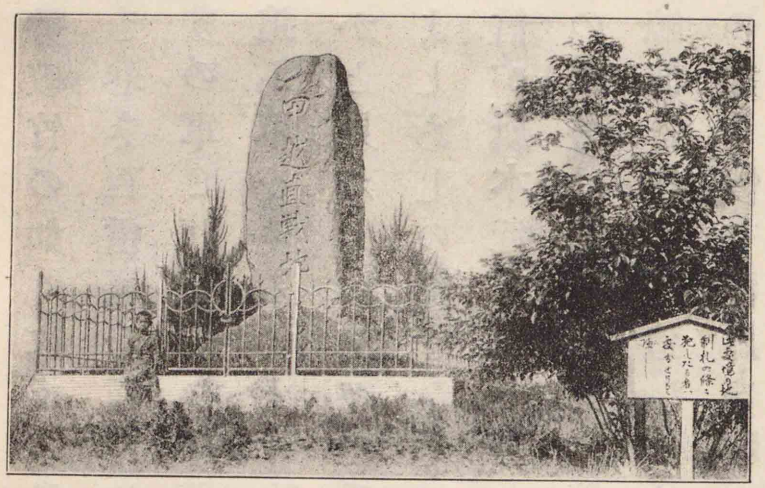
は之である。「百金傳入好事手。佩服可以禳妖凶。」といふのを見て、かの國人が尊重した樣子も知られる。

一一　川中島

天文二十三年秋の半ばの頃かとよ、(一)上杉謙信は八千餘騎を從へて、(二)川中島に討つて出づ。「われ此の度の戰は、(三)武田信玄をおつ詰めて、親しく雌雄を決せん。」と、渦卷返す犀川を、渡つて陣をぞ取りにける。信玄はこれを聞くより早く、二萬餘騎にてうち向ひ、砦を堅めて戰はず。謙信は氣をいらち、(四)村上義清に言含め、月影暗き山々の、草葉の露を分けさせて、彼方此方に兵を

(一)名は輝虎。越後の武將。村上義清の信濃より來りしを、之を援けて信玄と戰ふ。天正六年(一二三八)歿。年四十九。
(二)信濃國更級郡。千曲川と犀川と相會する所。
(三)名は晴信。甲斐の武將。天正元年(一二三三)歿。年五十三。雌雄を決す
(四)信濃國の人。天正元年(一二七三)歿。年

伏せ、樵夫に擬せし卒を出して、甲斐の陣營に近づかしむれば、甲斐の兵計略とはつゆ知らず、朝霧の間に追捲くる。待設けたる伏兵は、時こそ來たれと勝鬨を、どつと揚げつゝ、引つ包み、袋に物を取る如く、一騎も殘さず討取つたり。信玄怒つて軍勢を、雲霞の如くに繰出せば、謙信も備を立てゝうち向ふ。龍躍つて雲を起し、虎嘯いて風を呼ぶ。



甲越直戰地址

何れを勝としら眞弓

(一)上杉氏の老將。

勢破竹の如くにて、入亂れ〳〵攻戰ふ有樣は、颶風砂を卷き、百雷巖を拔くに異ならず。越後の勢退けば甲斐の軍これを追ひ、甲斐の軍退けば越後の勢これを追ふ。軍をすること十七度、何れを勝としら眞弓、引くかと見えし信玄が、一手の勢の旗を伏せ、川を渡つてよしあしの、隙をひそかに忍ばせて、勇み立つたる謙信が、旗本近く進みより、面もふらず斬つて入る。麾下の軍勢は思はぬ兵に襲はれて、走る後より甲斐の兵、鯨波を作つて追ひかくる。(一)宇佐美定行之を見て、猛虎の如く憤り、汗馬を驅つて大音に、我が手の勢に下知をなし、敵の横合より無二無三に突入つて、淵瀨もいはせず追落す。信玄度を失ひ、流を亂して走る所を、謙信唯一騎、赤の栗毛の逞しきに鞭を當て、「豎子何處まで逃ぐるぞ。」と、いひも果さず切りつくる。信玄刀を拔くに暇なく、軍扇にて受けたれど、扇は二つに折られたり。

流を亂す

豎子

ふると見て笠取るひまもなかりけり

川中島のゆふだちの雨

と歌ひし如く、二の太刀は、はや肩先に切込みぬ。あつといふ間に信玄が、命は岩に碎かるゝ、泡と消えなん危さを、救はんとして軍兵が、心はやたけに勇めども、水速くして近寄れず。部將原大隅、槍を延ばして謙信

心はやたけに勇む

を、突きはしたれどあだづきし、かくてはならじと槍を擧げ、唯ひとうちにと擊ちたりしに、馬に當つて馬逸す。謙信馬を鎭めんと、手綱かい繰る其の隙に、信玄は虎口を逃れ去りにけり。

鞭聲肅々夜過河。曉見千兵擁大牙。
遺恨十年磨一劒。流星光底逸長蛇。

(一)賴山陽が、謙信の信玄を擊つ圖に題せし詩。

かく信玄をうち漏したる謙信が、心の中や如何ならん、思ひやるだに哀なり。信玄は肩の痛手に耐兼ねて、其の夜の中に軍勢を、まとめて出づる月影に、道を覓めてはるゞと、我が故郷に歸りけり、我が故郷に歸りけり。

花卉
香芬
藪澤

一二　人の香

竹越與三郎

昨日或席上にて、一場の談話を求められ候ひしまま、「人の香」といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花たらんことを、人々に求め候ひき。今茲に青年諸君の爲に、更に此の趣旨を開陳致したく候。

山野に花卉少からず候へども、香芬あるものは多からず候。しかも香芬あるものは、藪澤の中にありとも、人のために認めらるべく候。これと同じく、人もまた香氣あるものとならんことこそ願はしく候へ。人の香氣とは、其の才智、藝能に伴なふところの精神を

漫然

此の身惜しむべし

眇たる

申すにて、何事を爲すにも漫然として爲さず、利己的に爲さず、一種の精神によりて爲すことを意味いたし候。苟も此の精神あらんか、其の事業の大小を問はず、必ず生命あり、色彩ありて、人を動かし、人を感ぜしめ、人に認めらるべく候。

さて人の香氣は何より來るかと申候に、自敬の念より來ることを忘るべからず候。自敬とは自ら尊大に構ふる譯にてはこれなく、自己が自己に對し敬意を表することに候。此の身惜しむべしと思ふ一念に候。眇たる此の身も天地の精靈を宿したる一塊なれば、大いに發しなば如何なる働を爲さんも知るべか

君子は獨行影に恥ぢず

君子は惡木の蔭に宿らず

〔Alexander.（西曆紀元前三五六―同三二三）

（二）藤原資朝の子。父の佐渡に流され本間山城入道に殺さるゝや、其の子三郎を殺して仇を復す。

らず候。然るに目前の劣等なる慾情に追はれて、尊からぬ所業を爲さんは恥づかしき限りに候。「君子は獨行影に恥ぢず。」と申すも、「君子は惡木の蔭に宿らず。」と申すも皆同じ意義にて、おのれを敬ふ念より出でし語に候。昔アレクサンドル大王に對して、敵軍に夜討をかけんと申出でし者ありし時、大王これを却けて、「朕は勝利を盜まず。」と申され候ひき。又日野阿新丸が父の仇を討ちしとき、先づ其の枕を蹴て目を醒さしめて後、これを討ち候ひき。古今戰勝の將軍、復仇の子少からざる中に、是等の人のみ多く語り傳へらるゝは何故なるかといふに、其の所業に精神あり、香氣あ

投機

るが爲に外ならず候。近來「我は如何にして富を作りしか。」といふ如き俗惡成功談の傳へらるゝが爲、世の青年を誤ること少からず候。小生は、青年諸君が、一時體裁よく暮すといふやうなる投機談に迷はず、唯其の才智藝能によりて、精神あり、香氣ある生活を營まんことを希望いたし候。香氣ある人は、世間必ずこれを認むべく、一時の不遇は決して失意落膽するに及ばず候。

以上は平凡の語には候へども、小生の平常家兒輩に語りをるものに候へば、無難にして間違なき事だけは確信致候。小生は、青年諸君が退いて右いふ香氣

を養はれんことを、偏に希望致候。

—讀書樓閒話—

一三　樂地

幸田露伴

如何なる處にも樂しき地はあるべし。又如何なる處にも樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懷に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎えかゞむ冬の時に當りても、うら悲しき事のみの胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に淸き

寂びたる趣興を涌かす

優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪なき話の興を涌かし、ぬく灰はたく燒芋の煖きに笑むをかしさもあるべし。金殿玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店草屋にも樂しき處はあるべし。

金殿玉樓茅店草屋

事物は大凡只一向ならぬものなれば、いと〳〵樂しからぬが中にも、樂しき處、樂しむべき處もあるべければなり。樂しき處、樂しむべき處を見出し得れば、如何ほど窮苦不快の中に在りても、人は自らに勇氣を得て、苦中の苦に堪忍び、やがて人上の人となり得ることもあるべし。さなきまでも、樂しからぬが中に、

身に賦す

樂しき地を見出さんことを常に心がけて、其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も潤く、氣もゆたかになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうにもなるべし。樂地を見出すべし。努めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

昔或江州の行商人と他の國の行商人と、共に碓氷の坂路を登り行きける折、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩高く重かりければ、二人とも憊れ苦しみて憩ひけるが、苦しさの餘りに、江州のならぬ商人、「碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦

しからぬは無けれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らんとしも思ふなり」と溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて「坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむ程は我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我はしかおもはず。此の碓氷の山を十程も重ねたる高き山もあれかし。さらば數多き行商人は、皆半途より身も憶れ、心も弱りて歸り去るべし。其の時、我一人如何にもして山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ」といひけりとぞ。同じ苦難の中に在りても、よく樂地を

身撓んで心撓まず
一路両人
一境両狀

觀るものは、身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路両人、一境両狀、よく〳〵思ひ味ふべきなり。

——洗心錄——

一四　歳の暮

三宅雪嶺

白駒の隙を過ぐ
恍として夢の如し

幼時は日月の過ぐるの遲きに堪へず。「稚子慇懃向ヒテ人問フ。睡ヲ過タバ幾日ヲ是新正」。齡漸く長じて漸く其の速なるを感じ、更に長ずるに及び、「今年は今年はとて暮れにけり」の感あり。又更に長ずるや、白駒の隙を過ぐるの歎あること愈〻切。遂に顧て恍として夢の如くなるに至る。時間に差なくして感情に差あること、亦甚だし

所由

と謂ふべし。かくの如きは種々の事情に由來すべけれども、其の主たる所由は、言ふ迄もなく人事の忙閑如何に在り。

幼時は簡單なる遊戯を事とし、日に同一事を繰返すに止り、何事か單調を破るものあらんを望み、節供、祭日を悦ぶと同じく、歳末、年始をも悦び、頻りに其の到來するを待つ。漸く長じて爲すべき事多きを加へ、動もすれば日を忘れ、改歳を思ふこと隨つて薄し。更に長ずれば從事する所の業務益〻繁く、或は二三年に跨がるあり、或は一層長きあり、數年に亙るが如きは事業の完成を待ちこそすれ、歳末、年始に何の興味を

烏兎匆々

(一)服部南郭。京都の儒者。寶曆九年（一七五九）歿。年七十七。
(二)荻生徂徠。南郭の師。享保十三年（一七二八）歿。年六十三。
蓬髪垢面

覺えず、唯「またか」と言ふに過ぎず。

歳末、年始に重きを置くは、其のなほ幼稚なる時の事にして、長ずると共に之を輕んずる傾向あり。日月の過ぐるを忘るゝは爲すべき事業の多きが故にして、烏兎匆々を歎ずるは寧ろ其の人の爲に祝すべし。境遇に順なるあり、逆なるあり、憂慮の餘りに事を忘るゝもあれども、多數の上より見れば、日常の業務に忙殺せらるゝなり。

されど四季の循環は昔日の如し。人皆寒暑を感ずる上は、全く歳末、年始を度外視する能はず。南郭(一)が徂徠(二)の許に年賀に赴きしに、其の蓬髪垢面にして滔々

孫子を論ずるに會ひ、其の儘に辭し去りしも面白けれど、(一)ジョン・アダムスが壯時日誌を記し、十二月末日に至り、「今年何事を爲しゝかを省て憮然たらざるを得ず、明年は大いに黽勉せざるべからず。」といひしは更に面白からずや。

—題言集—

(一) John Adams. 米國第二代の大統領。(西曆一七三五—一八二六)

憮然

黽勉

一五　雪

(二)朝ぼらけ有明の月と見るまでに
　よし野の里にふれるしら雪

これは降積んだ雪を朝戸開けて月と見まがつたのである。降積んだ雪も美しいが、大空を傾けて盛に降りしきる雪景色は、月には見られぬ眺である。「雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て起つて徘徊す。」と白樂天は歌つた。銀砂を散らすやうに、玉屑を降らすやうに、見て居る中に乾坤すべて一白。氷山峨峨たる北國の地では、面白いよりも寧ろすさまじい景色であらうが、我が國の秀麗な山川を降埋める變化の奇觀は、芭蕉翁でなくても、

いざさらば雪見に轉ぶ處まで

の感を起す。さはいへ

(一)こま止めて袖打拂ふ蔭もなし
　佐野のわたりの雪のゆふ暮

(二) 古今集、坂上是則の歌。百人一首にもあり。

大空を傾ける

乾坤すべて一白

(一) 新古今集、藤原定家の歌。

にはさびしい感がある。「雪の降る日は寒くこそあれ。雪の風流は稍冷たいものである。川柳子は

雪見にはばかと氣の附く處まで

と言つた。

安藤冠里(一)は大名で、俳句の達人であつた。雪の朝酒屋の小僧が、跣で街上を往還するのを見て、

雪の日やあれも人の子樽ひろひ

暖衣飽食、食ふに魚あり、出づるに輿ある大名の身分として、下をあはれむ此の心がなくてはならぬ。風流も仁恕の道に合しなければならぬ。

同じく俳人の西島といふ人、夕方から降りしきる

(一)名は信友。磐城國平の藩主。享保十七年(一二三九二)歿。年六十二。

食ふに魚あり、出づるに輿あり

仁恕の道

雪の景色の面白さに、いざ雪見に出かけようと丁稚に供を命じた。西島の妻は、「風流の心ある人には、雪見も面白からうが、みやびを知らぬ丁稚の身にとつては、どれ程つらからう。自分の子ならば、よも供にはつれられまい。」と、

みやび

我が子なら供にはやらじ夜の雪

西島手を拍つて、「此の名句を得たれば、今日の雪見は十分である。最早出かけるには及ばぬ。」と言つたとは、此の妻にして此の夫、かくてこそ風流の眞意を知つたものと言つてよい。

むかし延喜(一)の帝は、雪の降つた寒夜に御衣を脱せ

(一)醍醐天皇。

られて、「聊か民の苦を思ひやる。」と仰せられた。古事談には一條天皇にも同じ話を傳へて居る。此の仁慈の御行は、よく臣民を感泣せしめるに足りる。昭憲皇太后の御歌に、

あや錦とり重ねても思ふかな
寒さおほはん袖もなき身を

仁愛の御心は同じである。

一六　死中再生

櫻井忠溫

予は幾多の死傷した部下に取卷かれて獨り横たはつた。此の時は予が生命を天地の間に享けた以來の最も悲痛な、又最も無心な時であつた。予はネルソンの言葉の「天に謝す。予は予の義務を盡したり。」を幾度も繰返して、事は假令成らなかつたとしても、予として茲に一代の務を終へたことを喜んだ。他には何事をも考へず、唯止め度無く迸り出る血潮が、生れて二十五歳の生命を刻々に縮めつゝあることを知るのみであつた。負傷の痛苦は毫も之を感じなかつた。敵の若干は予の前方二三間の壕内を右に左に馳せめぐり、一人で五六挺づつも銃を引受けて、我が殘兵に向つて狙撃しつゝあつた。

予は目を見開いて彼等の動作をうちまもつて居

た時、後を振向いた一人の敵兵は予がまだ生きてゐるのを見て、他兵に目配をする間もなく、三四發ドンドンと撃ちかけた。而して劒を揮ひ、跳り上つて進み寄つた。予は目を閉ぢた。予は將に突殺されようとしたのだ。嗚呼、此の身は鐵石ではない、而も四肢は摧けて戰ふ力も盡きた予は、どうして之を禦ぎ之を追ふことができよう。予は將に豺狼の毒牙に劈かれようとしたのである。しかし天は尙未だ予を棄てなかつた。嗚呼、此の刹那。此の瞬間。予は耳近く接戰の聲を聞いただけで、名もない蠻奴の劒尖から免れた。敵兵が予を目がけて跳り上つた刹那に、我が殘兵の五六名

死を睹ること歸するが如し

が飛掛つて、白刃はこゝに亂れ合ひ、鬪つて共々に斃れた。かうしてたゞ死を待つばかりであつた予の息の根は、可憐な戰友の生命に代へて辛くもつながれたのである。

折しもあれ阿修羅王の勢でどつかと圍壁に立上り、銃劒を高く差上げ、喊聲を放ちつゝ、敢然として跳り込んだ一兵卒があつた。予は彼の猛勇と剛膽とに喫驚した。嗚呼しかし、彼は何處よりか飛來つた敵彈に忽ち撃止められて、崩るゝが如くに予の右側に僵れかゝつた。死を睹ること歸するが如しとかや。彼は寧ろ死を求めんが爲に最後の喊聲を張揚げ、健氣に

も唯一人敵中に跳り込んだのであつた。

稍あつて我が軍から發する砲彈は、盛に予等の頭上で破裂し始めた。着發彈は予等の身邊に落下して血煙を揚げた。或は足、或は手、或は首が眞黑に寸斷せられて飛散つた。予は觀念の眼を閉ぢて、我が砲彈の爲に一思に粉碎せられることならそれこそ遺憾なき介錯なれと念じて居たが、予が肉、予が骨は、尙其の碎破する所とならず、小破片のみが予の手足を傷つけた。予が左足の邊にゐた一負傷兵は、此の砲彈の破片で顏の眞向から幹竹割に劈かれて、足搔き藻搔き虛空を攫んで苦しんでゐたが、やがて俯伏せになつ

觀念の眼を閉ぢ

介錯

幹竹割

て息は絕えた。

暫くして又頭上で、「日本帝國萬歲」と呼ぶ聲が聞えた。目を開いて微かに一瞥すれば、嗚呼、彼も亦傷ついた狂者であつた。神魂は旣に喪失しながら、口には尙狂はしく萬歲を呼んでゐたのは悲壯である。彼は頻りに萬歲を唱へ、又「日本兵來い〳〵」と絕叫した。攻むるに殘卒無く、援くるに生兵なき今曉の慘戰には、彼も亦其の悲みを共にしたのか。彼は叫び狂ひ、狂ひ疲れて、果は唇を嚙んで色を失つた予は目を閉ぢた。

數個所の傷口から流れ出る予の血潮は、殆ど全身を朱に染めなした。繃帶を卷きつけたのは唯両手ば

翩飜

かり、他は其の儘に打棄てゝあつたのだ。予は目を閉ぢては靜に思ひ、目を開いてはじろ〳〵と見廻した。左右を顧ると、翩飜たる日章旗の下には、斃死した二人の我が兵があつた。思ふに此の地點は、此の勇敢な二兵によつて占領せられた後一の中立地帶となり、我が兵到らば敵の砲火に碎かるべく、敵兵現れなば我が砲彈の斃す所となるのであらう。此の二勇士は、自ら占領の功を遂げ得たのを喜んで、笑つて瞑目したのでは無かつたか。これこそ實に一篇の活きた詩では無からうか。嗚呼、誰か美しい言葉を以て此の二勇士の事蹟を弔はうとする詩人は無いであらうか。

生死のけぢめ榮辱の境

予は段々息苦しくなつた。絶命の期ももはや遠くないと覺つた。其の時予の胸倉を摑んで引上げたものがあつたが、すぐに又手を放した。予は微かに目を開いて見ると、二三人の露兵が坂を登つて行つた。予は危く俘虜たる恥辱を受けようとしたのである。敵が予を摑み、又予を棄てた此の一刹那、これぞ生死のけぢめ、榮辱の境であつた。敵は一旦予を摑み上げたが、もはや死んだ者と信じて棄てたのであらう。それも其の筈、予の全身は鮮血に浸つて居たのである。

時に何者か予の右側へちよこ〳〵と走り寄つて、無言の儘に倒れかゝつた者があつた。死んだのかと

思へばさうではない、死んだ眞似をしてゐるのだ。暫くする中、彼は予に呼いた。

「歸りませう」。

予は絶え〴〵に苦しい呼吸の中から彼を見れば、ついぞ見知らぬ一兵卒であつた。其の頭には繃帶を施してゐた。予は彼の情のある言葉に對して、かうなつてはとても自分は生きて還ることは出來ぬ。それよりか殺して歸つてくれと賴んだ。しかし彼は予の生命を全うして連れ還ることは覺束無いかも知れぬが、死骸だけでも取つて歸る。敵中に棄てゝ置くことは出來ぬと言ひながら、予の左手を握つて、其の肩にかけたのであつた。

一七　海軍戰死者ヲ祭ル

東郷平八郎

海陸ノ戰雲已ニ散ジテ、滿都ノ和氣藹々タリ。童幼歡ビ迎ヘテ、六親門ニ待ツ。是、諸子ト生死ヲ與ニシタル將卒ガ、大纛ノ下ニ凱旋セル頃日ノ光景ナリ。回想スレバ、諸子等ガ冱寒ヲ冒シ、炎熱ヲ凌ギ、勁敵ト鬪フニ方リテヤ、戰局ノ前途ハ尚未ダ知ルニ由ナク、諸子ノ逝ク毎ニ、マヅ其ノ忠死ノ榮ヲ得タルヲ羨ミ、我等モ亦必ズ諸子ニ倣ウテ君國ニ報ユルヲ期シタリキ。然ルニ諸子ノ勇戰奮鬪ハ常ニ其ノ効果ヲ奏シ、皇軍

—肉彈—

戰フ毎ニ勝タザル事ナク、旅順ノ連陣十閲月ニシテ大勢ヲ定メ、日本海ノ鏖戰一舉ニ勝敗ヲ決シ、爾後海上復敵影ヲ見ザルニ至レリ。是、固ヨリ無量ノ皇德ニ基ヅクト雖モ、亦諸子ガ身ヲ外ニ忘レテ奉公シタルノ致ス所ナラズンバアラズ。今ヤ征戰其ノ終ヲ告ゲ、我等凱旋ノ將卒四顧歡喜ノ光景ヲ見ルニ當リ、諸子ト此ノ悅ヲ頒ツ能ハザルヲ懷ヒ、悲喜交至リテ、感慨言フベカラザルヲ覺ユ。然レドモ帝國ノ今日アルハ、即チ諸子ガ一死ノ榮アル所以ニシテ、諸子ノ忠烈ハ永ク我ガ海軍ノ精神ト爲リ、帝國ヲ無窮ニ守護スベシ。茲ニ典ヲ擧ゲテ諸子ノ靈ヲ祭リ、聊カ懷ヲ陳ベテ祭詞ニ代フ。尚クハ來リ饗ケヨ。

明治三十八年十月二十九日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

一八　旅順の戰跡

夏目漱石

眸を遮る

下を見おろすと、山の側面はそれ程急ではないが、樹と名のつくやうな青いものは、まるで眸を遮らない。一目に麓まで見透かされるのみならず、麓からさき一里餘の畠が、眞直に眉の下に集つて來る。此の邊の空氣は、內地よりも遙に澄んでゐるから、遠くのものが、つい鼻の先にあるやうに鮮である。其の中で、高

對壕

窖道

梁の色が一番多く目を染めた。

「あの先に小指の頭のやうな小さい白いものが見えるでせう。あすこから此方の方へ向いて對壕を掘出したのです。」とA君が遠くの方を指さしながら言つた。此の邊に穴を掘るのは、石を割ると一般なのだから、一町掘るのだつて容易な事ではない。現に外壕から窖道へ通ずる路をつける時などは、朝から晩まで一日働いて四十五サンチ掘つたのが、一番手柄であつたさうだ。

余は余の立つてゐる高い山の鼻と、遠くの先にある白いものとを見較べて、其の中間に横たはる距離

胸算用

旅順爾靈山

を胸算用で割出して見て、軍人の根氣の好いのに全く敬服した。「全體、何處まで掘つて來たのですか。」と聞返すと、「つい其處です。」と、サーベルを向けて教へてくれた。何でも、九月二日から十月二十日とか迄掘つてゐたといふのだから、恐るべき忍耐力である。其の時敵も、砲臺の方から反對窖

道といふのを掘つて來た。日本の兵卒が、例の如く工事をしてゐると、何處かで、かん〳〵石を割る音が聞えたので、敵も暗い中を、一寸、二寸と近寄つて來た事が知れたのだといふ。「爆發藥の御蔭で外壕を潰したのは此の時の事であります。」と中尉は其の潰れた土山の上に立つて、我々を顧た。我々も無論、其の上に立つてゐる。此の下を掘れば、いくらでも死骸が出て來るのだといふ。

土山の一隅が少し缺けて、下の方に暗い穴が半分見える。此の天井が、厚さ六尺もあらうといふ(一)セメントで出來あがつてゐる。身を横にして其の穴に這込

(一) Cement.

みながら、だら〳〵と石の廻廊に降りた時に、仰向いて見て、始めて其の堅固なのに氣がついた。外壕を崩した上に、此の厚い壁を破壞しなければ、砲臺をどうする事も出來ないのは、攻手に取つて非常な困難である。しかも此の小さな裂目から無理に割込んで、一寸、二寸とじり〳〵にセメントで築き上げた塞道を占領するに至つては、全く人間以上の辛抱競に違ない。其の時両軍の兵は、此の暗い中で、僅かの仕切を界に、唯一尺程の距離を取つて戰をした。仕切は土嚢を積んで作つたとか、A君から聞いた樣に覺えてゐる。上から頭を出せばすぐ擊たれるから、身體を隱して

亂射

亂射したさうだ。之に疲れると、鐵砲をやめて、両側で話し合つた事もあるといつた。「酒があるならくれ。」とねだつたり、「死體の收容をやるから少し待て。」と賴んだり、「あんまり下らんから、もう喧嘩を止めにしよう。」と相談したり、色々の事を言合つたといふ話である。

三人は暗い廻廊を這出して、又土山の上に立つた。日は透徹る樣に明るく坊主山を照らしてゐる。野菊に似た小さな花が處々に見えるぢつと日を浴びて佇んでゐると、微かに蟲の音がする。草の裏で鳴いてゐるのか、崩れかゝつた窖内で鳴いてゐるのか分らなかつた。向ふの方に支那人の影が二人見えたが、我

我の姿を認めるや否や、草の中に隱れた。「あゝやつて何か掘りに來るんです。つかまると怖いものだから、すぐ逃げます。なかく取抑へるのが困難です。」とA君が苦笑した。

後側へ回ると、廣い空壕の中に立派な二階建の兵舍がある。もとは橋を架けてあつたものと思はれるが、今では下りる事も出來ない。兵舍の後はもとより山に圍はれて、外から見えなくなつてゐる。三人は空壕を横に通り越して、尙高く上つた。とうく四方にあるものは、山の頭許になつた。さうしてそれが一つ殘らず昔の砲臺であつた。中尉はそれらの名前を悉

く諳んじてゐた。余は遮るもののない高い空の直下に立つて、數限りもない山の脊を見渡しながら、砲臺巡も容易な事ではないと思つた。――滿韓ところ〴〵――

一九　伊達政宗　其の一　新井白石

左京大夫輝宗は中納言政宗(一)の父なり。輝宗初め子息二郎が元服せし時、「先祖大膳大夫政宗、文武の名譽天下に隱なかりき。されば汝も又あやかり參らせよ。」とて、政宗と名のらせ、十八歳の天正十二年十月家を繼がしむ。政宗はじめ米澤(二)の城に在り。明くれば十三年十月八日、父輝宗二本松(三)右京亮義繼(四)が爲に討たれ、

(一)有名なる武將。仙臺藩祖。寛永十年（一二九三）歿。年七十。
あやかる
(二)羽前國。
(三)岩代國安達郡。
(四)畠山義繼。

義繼亦政宗が爲に討たる。これより政宗隣國の敵と戰つて、終に蘆名(一)の家を滅し、會津仙道を併領し、黑川の城に移り住みて、威を東北に振ふ。かゝる所に豐臣秀吉、關白の職に任じて、王命に背く國々を征伐すべしとて、數十萬騎の軍勢、東海、東山、北陸を經て、關東に攻下り、相模の國北條が領せし國々を悉く打從へて、やがて奥羽の地をさして攻下るべしと聞ゆ。政宗先づ太宰金七といふ家子して、秀吉の軍の樣を伺はしむ。「北條が亡びんこと遠からず。」と申す。さらばとて郎等遠藤不入齋を使者として、關白に音信を通ず、急ぎ政宗御陣に參り向ふべきよし仰せ下さる。

(一)岩代國黑川（今の會津若松）の城主。

やがて家子、郎等等百騎を具して、天正十八年六月本國をうち立ちて、下野の國にさしかゝり、小田原に赴く。道塞がつて通り得ず。會津のうち大内といふ所より引返し、越後國へかゝり、日數經て小田原に到る。關白先づ底闇(一)といふ山の中に旅館點じて、政宗を入れらる。政宗二十餘の男の、眼片方なる、髪短く押切つてうちかぶり、其の貌甚だ異體なり。關白さるしれ者と聞し召して、對面の儀なく、やゝあつて後、使者を以て尋ね問はるゝ旨あり、「抑、秀吉忝くも鹽梅の臣に列り、博陸の職に任ぜしより此のかた、普天の下、率土の濱、凡そ王命を重んずる程のもの、我が門に祗候する

(一)箱根七湯の一なる底倉。
しれもの
鹽梅の臣
博陸の職
普天の下率土の濱
祗候

輩、千里を遠しとせず。然るに政宗累代の家を承繼ぎ、數郡の地を押領し、遂に一度の使者をだにまゐらせず。毎に隣國の大名等と地を爭ひ、兵を構へ、中にも故三浦介盛隆(一)、さしも當家に志深かりしに、彼の家を滅して、會津仙道十一郡(二)の地を合せ奪ふの條、甚だ以て奇怪なり。きつと一々に陳じ申すべし。」と仰せ下さる。政宗此の由を承りて、「政宗去年三浦介盛隆が男義廣を討取る事、天下既に泰平に屬せんとするに及びて、政宗濫りに干戈を動かして隣國を侵し奪ひし樣にも聞し召されてや候らん。さりながら、事近きに決すといへども、其の事の由を尋ぬるに、一朝一夕の故に

(一)蘆名盛隆のこと。三浦介義明の子孫なればいふ。
(二)會津四郡、仙道七郡。
奇怪
一朝一夕

あらず。初め義廣、政宗が父輝宗に叛きし郎等大内某と申す者に黨し、佐竹岩城の者共と牒し合せて、我が家を滅さんとす。希有にして彼の大内を退治仕り訖んぬ。程なく父にて候者、二本松が爲に討たる。父の讐の末なるに依つて、政宗二本松を討たんとする所に、義廣また佐竹岩城と二本松を助く。政宗彼等と戰ふこと日々夜々、遂に一戰の利を得て、義廣を滅す。されば政宗が四隣に敵を受けて、日夜の戰止む時なく、道路既に差塞がつて、近き境の事をだに知り難し。まして遠き境の事、夢にだも知らず、一介の使をも參らせず候ひき。全く王命を輕んじ、殿下を蔑如し奉りしに

牒し合す

希有にして訖んぬ

蔑如

あらず。殿下此に御下向あるに至りて、初めて天下既に歸する所あるを存じ知りて、不日に參向仕る所なり。」と答へ申す。重ねて御推問の事ありしに、陳じ申す所、一々理を盡す。關白重ねて、「北條が滅びんこと近きにあり。秀吉又王命に叛く東夷等を悉く征伐せんと欲す。政宗陳じ申す所詐る事なからんには、此の程合せ奪うたる會津仙道の地悉く奉りて、軍門に祗候すべし。若し此の事叶ふ可からずんば、己が國を守りて、戰に備ふべき計略を廻らすべし。何れの道ならんにも、速に馳歸りて、御下向を待ち奉るべきなり。此の度の見參は先づ叶ふべからず。」とて、押して還さる。政宗

不日

急ぎ會津に馳下り、同じき七月十三日、黑川を打立つて米澤の城に移り、關白の御迎として、下野國宇都宮に參り向ふ。秀吉大いに悅び給ひ、やがて對面の上、色色の饗應事終り、自ら茶點して賜ひ、政宗を先立てゝ陸奧に下り給ひ、木村(一)伊勢守をして、政宗が手より會津の城を受取らしめ、會津仙道並びに越後の國小河の庄凡十二郡の地、蒲生飛驒守氏鄕に賜はりて、奧羽兩國の守護とし、木村伊勢守父子に葛西大崎の地を賜ひ、氏鄕に副へらる。

茶點

(一)名は貞時。

二〇　伊達政宗　其の二

關白都に歸り給ひし後、此の年の冬葛西大崎の地、此處彼處逆徒蜂起して、木村が城々攻落さると聞えければ、氏鄕急ぎ政宗に牒し合せて、軍勢を率ゐ、馳向ひて逆徒を打滅す。かゝる所に伊達が譜代の郎等須田伯耆、氏鄕の陣に來り、「政宗會津仙道の地奪はれて安からず思ひ、賊徒等催して、國亂さんと支度し候」と告げければ、氏鄕「されば、こそ、初より怪しき事の多かりけれ」とて、政宗に心を許さず。關白奧に軍起りぬと聞し召し、淺野彈正少弼長政(一)、追討の御使を承り馳下る。氏鄕既に賊徒を退治して引返し、二本松にして長政に行合ひ、打連れて上洛す。政宗も同じく上洛し、讒

(一)秀吉の臣。甲斐に封ぜらる。慶長十五年(二二七〇)歿。年六十五。

者の實否を糺さんとて都に上り、妙覺寺を旅館とし、罪なき由を陳じ申す。關白更に實事とし給はざりしかど、深き慮ましくければ、先づ政宗が伊達、信夫、刈田、柴田等の郡をば、氏郷が此度の勳賞に賜ひ、葛西、大崎の地を沒收して、天正十九年六月、暇賜ひて國に歸さる。今年政宗岩手澤(一)に移る。程なく賊徒起りて、宮崎の城に立籠りたるを攻破つて、首ども都に獻りければ、關白の御感を蒙り、後侍從に任ぜられ、朝鮮の事起りしかば、千餘人を引具して、名護屋(二)に陣しけり。

明くれば文祿二年三月、政宗、淺野(三)左京大夫幸長と朝鮮に渡りて、手合せに先づ釜山の邊にて、朝鮮の兵

(一)陸前國玉造郡。今の仙臺の北方十一里。
(二)肥前國東松浦郡。
(三)長政の子。秀吉に仕ふ。慶長十八年（一二七三）歿。年三十八。

八十三が首切つて獻り、同年七月諸大名と共に晉州(一)の城を攻落す。其の後少將に任ず。同じき四年二月氏郷卒して後、其の男宇都宮に移されしかば、政宗仰を承り、歸國して、國務を沙汰す。此の年七月、關白秀次謀反の聞あり

伊達政宗木像（松島瑞巖寺藏）

國務を沙汰す

(一)慶尙南道の首都。

て誅せられ給ひ、政宗も彼が與黨なるよし風聞す。

政宗大いに驚き、急ぎ大阪に赴き、先づ施藥院の家に在りて、罪なき由を陳ず。太閤御使を賜はりて、御糺問両度に及び、其の後仰せ下されしは、秀頼が誕生の初、汝が男五郎を參らす。これ秀頼が被官の初たり。されば彼の男を以て伊達の家を繼がせなん。汝すべからく遠島に移さるべし。速に本國に留る宗徒の家人等、悉く召上せよ。彼等參らん程はおのが舘に籠居すべき由なり。政宗因りて都に上り、聚樂(一)の家にあり。

かゝる所に政宗が家子、郎等、京中を焚拂ひて切死すべしと聞えて、洛中以ての外に騒動し、また政宗が太閤討奉らんとする謀の様一々に記し、江戸(二)中納言殿伏見の御舘の邊に榜を建つ。太閤此の榜の様を御覽じ、「政宗憎しと思ふ者のしたる、ござんなれ。さては秀次に與せしなどいふことも、此の榜建てし奴原が所爲なりけり」とて、遂に咎ゆるされて歸國す。

被官

(一)秀吉内野に邸舘を造りて聚樂第といふ。諸侯の宅は其の左右にあり。

(二)徳川家康。

ござんなれ

二一　伊達政宗　其の三

此の時の事、伊達上野(一)、年經て後親しき者に語りしを聞きしと申す老人の申せしは、此の度政宗が咎免されし事、偏に徳川殿の御力なり。初め太閤、政宗を伊豫の國に移さんとせられしに、政宗大いに驚き、徳川殿に就いて愁訴せんとて、伊達上野並びに親しき家

(一)政宗の叔父政景。

愁訴

陪膳

子一人添へて、伏見の御館に參らす。徳川殿二人の使を御前に召さる。朝やゝ寒き頃なり。御火燵に倚りてましまず。二人が申す旨を聞し召し、御氣色いかにも和らがせ給ひて、「朝とく參れり。餉未だなるべし、賜ばるべし」と仰せらる。やがて御膳を進む。二人御前を立たんとせしに、たゞそれにて賜ばれ」とありしかば、御前に侍ふ。かねてより御飯を黄銅の鉢に入れて、御火燵の上に置かれしを、陪膳の人とりて參らす。徳川殿、「二人が賜ばる飯、冷えぬらん、これ賜ばれ」とて、かの御飯を賜はり、御菜の地に落ちたりしを、御指に點し給ふやうにて、戴かせ給へば、陪膳の人とりて御膳の傍

荒涼

に置く。其の後御茶を進めしに、召しのこして、二人に賜ぶ。御心よげにいろ〳〵の御物語どもあり。やゝありて二人の使、「政宗如何に待遠に存ずらん。御返事うけたまはるべし」と申せし時、御褥より下りさせ給ひ、大きなる御聲にて、「やあ、おのれら主人は、さしも日頃は世の人をば這ふ蟲とも思はず、荒涼のこと吐きちらし、をこのふるまひ多けれど、かゝる際に至りては、世の常の氣勢夢ばかりもなし。かゝる人を臆病の者とはいふぞ。如何におのれらが身は、伊豫の國に渡つて、魚の餌にならんとや思ふ。又都の内にあつて、犬の食にならんと思ふか。此の二條の中きつと思ひ極め、

雜人ばら

大童

愁訴をも申さば申せ。返事すべき事あり、近く參れ」と召す。二人恐るゝ御側に參る。御旨承りて歸る。此の後伊達が家子、郎等「たゞ討手を待つて死ねや」とて、大いに動き立つ。洛中の貴賤驚き騷ぐこと夥し。此の由大阪に聞えしかば、太閤「事の樣をも見よ」とて、政宗が在國の家人等急ぎ召すべきよし、催促の御使を賜はる。政宗が家子、郎等をはじめ、雜人ばらに至るまで、或は弓を押張り、矢かき負ひ、鐵砲に火繩さし挾み、槍、長刀杖につき、大庭にみち滿ちたり。政宗御使と聞いて、大童なる儘にて刀をも帶せず、兵者共おしわけおしわけ、門開かせ内に請じ入れ、仰承りて後、「政宗こたび

僉議

仰承つてより此の方、家子、郎等僉議して曰く、『何でふ先祖累代の地を離れて知らぬ國にさまよひ、天下に恥をさらすべき。政宗は尋常に腹を切れ。おのれらは一々に討手の御使を待つて、切死仕るべし』と議定す。政宗之を制して言葉を盡すといへども、かゝる大臆病の主人とは日頃思はずと、一向に下知を用ひず。さしも年頃は政宗が申さん程の事、如何なる僻事ならんにも背く事なかりし奴原が、今政宗が殿下の御咎蒙りて候へば、おのが主をもあるものとも存ぜず、かかる不思議をふるまふ事に候。此の由さだめて御聽にも達しけんが、全く政宗が所存にあらず。もし御尋

申し開きて

あらんには、よきに申し開きて給はるべし。又在國の家人上洛の事、催促既に畢んぬ。今に至りて、一往の返事をも參らせねば、彼等また如何なる奇怪をや仕り出すらんと、安き心も候はず」とて、御使を返しぬ。德川殿も洛中の騷動を聞し召して、大阪に參り給ひ、都にて政宗が家人等を誅せられん事、何程の事か候べき。さりながら、在國の家人等、累代の主人失はれぬと聞かば、理非わきまへぬ荒えびすども、如何なる仰候とも、よも御下知に從ふまじ。朝鮮の事いまだ定まらざるに、本朝の内また忽ち兵革起らん事は、深く憂ふべきところに候はずや。また罪の疑はしきをば輕んずとも承る。かの累代の所領奪はれんも、かつは不便の至なり。然るべくは、先づ此のたびは寛宥の御沙汰もや侍らん」と仰せられし中に、落書の事起りて、終に恙もなかりしとなり。

—藩翰譜—

落書

二二　丈夫の吟

金崎賢

あら海のそこひ、深山の奥。
よき金、よき石　うもれ沈む。
海には風あり　波さかまき、
山にはけだもの　吼えのゝしる。

風をば怖れて、海に背き、
けものに愕き、山に入らず、
たからを獲んとて身をあせるも、
たからに足なし、みづから來らず。

さつを
かづく

熊捕るさつをは穴にも入り、
珠拾ふあまは浪をかづく。
怖れては成らず大なる名、
ためらひて遂ぐる事ある無し。
苦みにあひて腕こまぬき、
息つき歎くはをのこならず。

試しの石

わがこゝろ鍛ひ腕をみがく
試しの石ぞとはげみ立てよ。
かなしみある時胸ふさがり、
かうべを垂るゝは人の耻ぞ。

嚴に立つ矢

嚴に立つ矢も心からと、
たゝかふ力をふるひ起せ。
さはりは世の常、氣を挫かず、
さまたげ起るは成るしるしと、
そらうつ浪にもつき入るべし。
爪とぐ虎にも笑みて向へ。

あを海のま中　岩が根組み、
　み國造りし　大和男の子、
海よりは強き　力を受け、
　山よりは高き　心を得たり。
夕日の岩角　負立つ獅子。
　朝風に翼　ひろぐる鷲。
其の強き姿　高きこゝろ、
　ますらをわれの　かゞみとせん。

二三　簡易生活

衣食住に簡易である事は、日本人の美德である。上代の衣服には、曲玉の樣な珠をかけた事が見えたが、これとても今日から見れば粗末なもの、しかもそれは高貴な身分の方に限られたらしい。他は概して今日の朝鮮人の樣に、飾の無い白い服だけで、何等の裝飾も無かつた。隨分文明の發達しない野蠻人でも、裝飾を好む國民は、鳥の羽を附けたり、獸の皮を附けたり、貝を飾つたりするが、日本には其の風が無い。本來が食物住居共に簡易に甘んずるといふ風がある。

文明の進むに隨つて、種々の贅澤の進むのは自然の事で、奈良時代、平安時代と段々生活程度の進んで

施政

來たのは事實である。平安時代になつて驕奢に流れたといふ。藤原氏など上流社會の者が奢侈に流れたことはあつたが、朝廷が驕奢をなさつて下民の怨恨を買つたといふやうな例は一つもない。皇室は禮儀、道德、風雅等の淵源であつたが、儉約の德に於ても、朝廷がやはり模範となられたのである。

鎌倉になつての幕府の政は、全く勤儉で押通した。賴朝は衣服に於ても自ら其の例を示して居る。何事も質素簡易を旨とするが、幕府施政の方針であつた。それ故鎌倉時代の話として、傳はつて居るのには、儉約に關することが多い。中にも北條時賴の儉約であつたことは、徒然草に味噌を戸棚から尋ね出して酒を飲んだ話がある。時の執權としては實に儉約なことである。其の母の松下禪尼が明障子の切張をしたことも徒然草にある。時賴の用ひたといふ青砥藤綱といふ人が、十文を落して五十文の松明をとぼして拾つたといふ儉約な話も、やはり時代の精神を示して居る。儉約をして、何かの時には役に立たさうといふので、平素は麁衣麁食に甘んずるといふことは、武家を通じての教訓である。足利時代になつての各家の家法家憲ともいふべきものは、いづれも儉素を條文に立てゝ居る。

時代精神

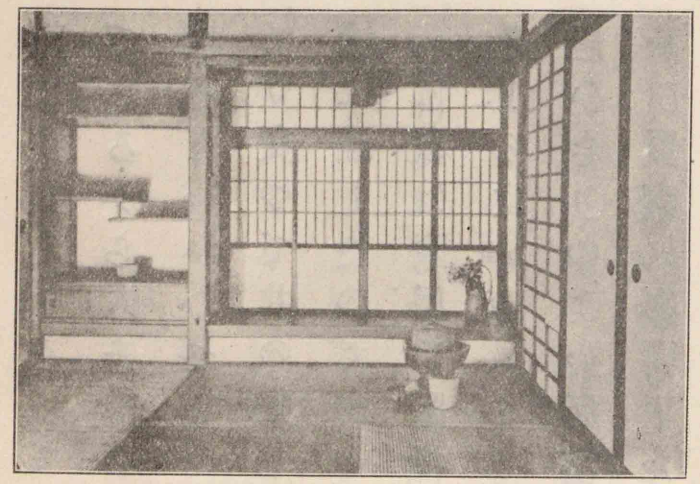
條文に立つ

擯斥

淡泊洒落

足利將軍の驕奢といつても、何程の事でも無かつたらうとおもふ。金閣寺、銀閣寺を見ても大抵は察せられる。總じて世間の富貴や驕奢に近づくものは、寧ろ下品な所行として擯斥する氣風が、此の時代を支配して居た。即ち高尚といふこと、又風流とか風雅とかいふものは、富貴に遠ざかつて寧ろ簡易な生活に在りとの思想が流行したのである。俳人は和歌者流に對して起つた一種の平民的文學者であるが、これも淡泊洒落を以て其の道の眞意を得るものとした。足利時代の連歌者流にも既に其の氣風が認められるが、芭蕉の說くところ、俳味は奈良茶にありとした。

閑寂



茶室（銀閣寺東求堂）

奈良茶といふのは茶粥である。俳人中には品性の惡い幇間的の者もあつたが、芭蕉の風流は淡泊な生涯を風流としたのである。

右の通りであるから、俳人は其の家の飾に美しい金ぴかの物を用ひない。すべてが閑寂な味を以てして、一椀の抹茶に一幅の掛物、一輪の花ざしで趣味を其の中に求める。物の多くを望まず、少しにして足る。富の眼を眩するを

望まず、貧しきを以て安んずる。かういふ淡泊な氣象であるから、人を羨まず、世を恨まない。禪家といひ、俳諧者といひ、いづれも隱遁者、世棄人に似て、實は世間に立交つて、其の榮華に心を惑はされまいといふ境域に達したのである。

佛敎は國民を厭世的にするといふが、日本では寧ろ其のよい方ばかりがあらはれた。其の質素の風と、思ひきりのよい所、富貴を超越した點は、武士の決斷及び質素に影響したことが少くない。元寇の役の一斷などは、禪宗の安心に由來することが多かつたらうと思ふ。

似て非

分を守る

此の祖先の風はいつまでも保存しなければならぬ。併し食ふ物も食はずに儉約するのは、もとより儉約では無い。儉と吝とは似て非なるものとは昔の人も言つた。積極的にはたらく爲には、飯も澤山食はねばならぬ。唯分を守るといふ心得が肝要である。木綿着に慣れ麥飯に甘んじた老農は、絹布を纏ひ白米を食ふのを勿體ないといふ。此の勿體ないといつて、身の程を守るだけは、いつまでも保存したいと思ふ。「恭儉己ヲ持シ」で、成るべく新しい贅澤に遠ざからなければならぬ。

二四　我が家の富

德富蘆花

家は十坪に過ぎず。庭は唯三坪。誰かいふ、「狹くしてかつ陋なり」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狹しと雖も仰いで碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。

永遠を思ふ

神の月日は此處にも照れば、四季も來り、風、雨、雪、霰かはるゝ到りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜に觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて、樹に滿つ。風ある日には、薄青く霞める空より、白き花ちらゝと舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。

鬱陶

隣家に花樹おほし。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を着く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の山梔あり。五月鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、此の花の我が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の梧あり。碧幹亭々として少し

の歪なく、吾が如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の側なる八角金盤とは、葉潤うして、我が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくづくぼふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えいで、たゞ一株、前の家主の植殘したる黄菊も咲きいづ。名苑の花美しといふとも、秋のあはれ、閑寂の趣は却つて我が庭の一枝にあるべし。蛻巖(一)の翁ならば、「獨憐細菊近荊扉」とや吟ぜん。耻づらくは「海内文章落布衣」と唱すべ

滾々

(一)梁田蛻巖。明石藩の儒者。寶暦七年(一七五七)歿。年八十六。

(二)蛻巖の九月九日の詩に、「琪樹連雲秋色飛。獨憐細菊近荊扉。登高能賦今誰是。海内文落布衣。」

き身にあらざることを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして滿樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、其の葉翩々として飜り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人はいふなる錦を我は庭に敷きつめぬ。

木の葉落盡してはさすがに寂しげなれども、日影、月影いよ〳〵多くなりて、空を見、星を見るに、障少きは嬉し。

―自然と人生―

(一)駿河國志太郡。大井川の東岸。
(二)遠江國榛原郡。大井川の西岸。

はしやぐ

二五　冬枯の大井川

千葉江東

東海道島田(一)の驛はこゝに盡きた。「此の川一つ向ふへ渡れば、其處が直ぐ金谷(二)の町だ。」といふ。今、大井川の冬枯の堤に立つ。

飽くまではしやぎきつた冬の空は、底も知れぬ程凝つて蒼く、見るも寒げに、高く〳〵澄んで居る。白い雲が、時々ぽつちり浮んでは、又一たまりも無く吹流される。風の凪いだ大海に、白い帆影が現れては、又辷つて行くとも思はれる。日は小春日の様に暖いが、風は飽くまで冷たく骨を刺す。岸の水楊の葉は半ば枯

名にし負ふ

展開

れて、ほろ〳〵とこぼれる。肩を窄めて、俯いて泣いてゐるのではあるまいか。名も知らぬ小鳥が、矢の様にひよい〳〵と飛んで出ては、劈くやうな細い聲でヒーヒーと啼く。「冬が來た。宿が無くなつた。」と鳴くのかも知れぬ。名にし負ふ天龍、富士に押並んで、東海道隨一の大河と呼ばれた大井川も、今は瀬は涸れ、水は落ちて、廣さ何町といふ石ばかりの河原が、眼前に展開されて居る。見渡す河上も、河下も皆磧である。石といつても幾百年と無く激流に洗はれて、握飯の様に圓くなつて、灰茶色に晒されて居る。其の灰茶色の石原の中を、幾箇にも割つて白く動くは、大井川の流であ

瀬枕立つ

らう。白い流水は、日光を浴びて青く緑に閃めく小石を嚙み、大石を嚙んで、瀬枕立てゝ滔々と流れて行く。小鳥の時たまに啼く聲が、他界からでも來る樣に響く外には、河の両岸の此の眞晝を、寂として鍛冶屋の鎚音一つ響かない。若し夢に容あらば、此の靜寂は即ち夢の容であらう。若し夢に聲あらば、此の流の聲は即ち夢の聲であらう。水は滔々として百年二百年の夢を見て、夢の樣に流れて居る。岸に立つ人亦恍として、何時しか二百年三百年の昔の夢を繰返してゐる。

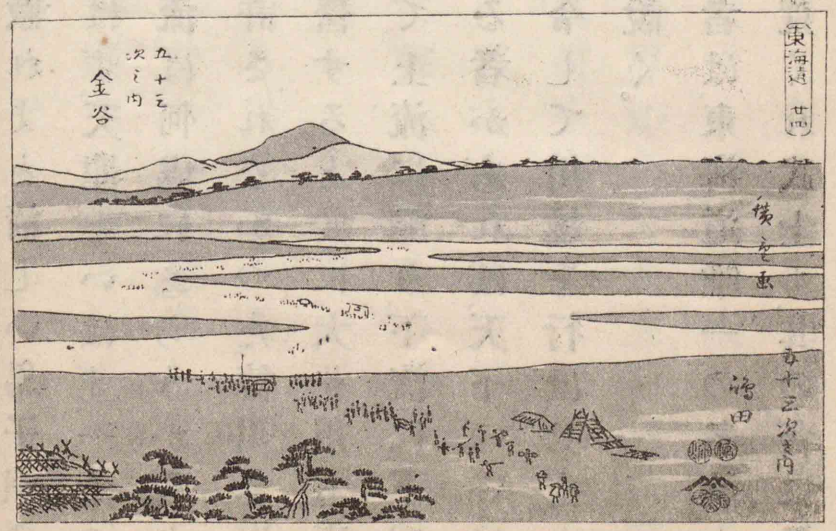
「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」。何處となく長閑な馬の鈴がちやらんちやらんと鳴つて、空にも入れよ、地にも徹れよと、清しい馬子唄の聲が夢に入る。吁、富士といはず、天龍といはず、一葉の船、一本の棹で越されぬ河流は何處にあらうか、獨り大井川は、船で越すことを許されなかつた。德川幕府が江戸に移つて關東を經營すると共に、大井川を東海一の要害と見た。若し船で上流に溯り、下流に下つて、此の河の形勢を見極める者があれば、天下の守は悉くこれから破れる。乃ち令して川越を行はせたと、土地の歷史に精しい人は說く。

裸一貫

かくて裸一貫の荒くれ者は、東海道唯一の名物となつた。さしも鬼を取挫ぐ荒くれ武士も、其の背に負

零落

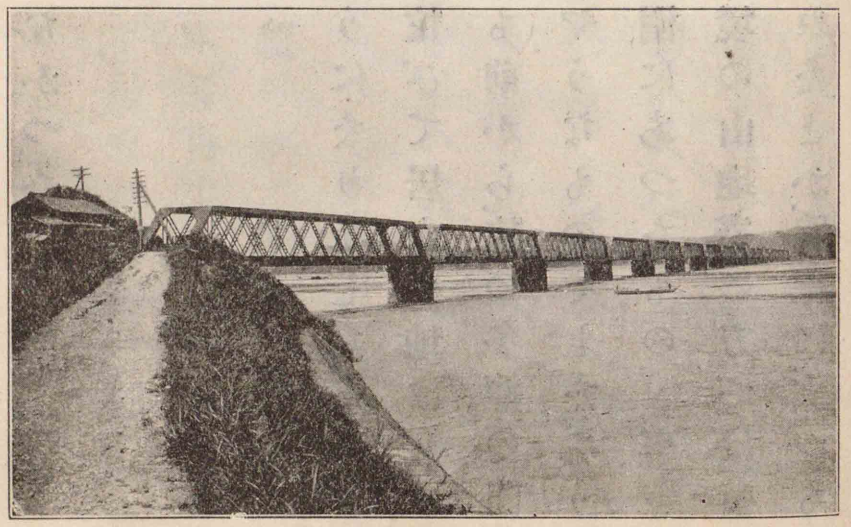
はれては、ぐうの音も出ず、島田、金谷の全盛目を驚かしたのも、今は昔だ。寢てこそ渡れ大井川。其の大井川の岸に、今初冬の日光を滿身に浴びて立てば、盡きせぬ流の聲も無意味に聞く事は出來ぬ。石に碎けて咽ぶのは、「昔の全盛を聞け」と語るのでは無いか。今の零落に泣いて居るのでは無



昔の大井川（廣重筆）

〔Platform.〕

いか。自分は昨夜、日が暮れて島田の驛に降りた。降りる人僅かに一人二人。狹いプラットホーム(一)を潛つて驛を出ても、人力車一つあるでは無い。風は寒い、滿天の星の光さへ冴えて、ぶるぶると震へて居る。舊式の懸行燈の火影をたよりに、鞄を抱へて一夜の宿を探した自分は、今更に島田の



今の大井川

宿の衰頽を泣かざるを得なかつた。

―舊幕府の名殘―

二六　春を待ちつゝ

島崎藤村

暖い雨がふつて來るやうになりました。來るか來るかと思つて、此の雨を待佗びて居た心地は有りませんでした。私共は五箇月も前から、旅の冬籠の間唯それぱかりを待つて居たやうなものでした。さう申しては何ですが、私共の周圍にあつたものゝ事を思つて見て下さい。佛蘭西國境の山地寄の方では、塹壕が深く積雪の爲に埋められたとか、戰線に立つもの

塹壕

の霜燒を救ふために毛布を募集するとか、さういふ勞苦を思ひやる市民の心が、今日まで續いて來ました。開戰以來五六十萬の佛蘭西人は既に死んで居るといふ話です。此の戰爭が終るころには、滿足な身體でもつて巴里へ歸つて來る者は少からうといふ話です。私共が町で行遇ふ留守居の婦女でも、老人でも、子供でも、やがて來る春を待つて居ないものは無いやうでした。寒苦、寒苦、此の避けがたい戰爭の惱みの中で、世界の苦みの中で、草木の再生がやがて自分等の再生であることを願つて居ないものは殆ど有りますまい。

(一)大正三年。歐洲戰爭の初年。

(二)Marronnier.

春の焰

去年に比べると、今年は並木の芽出もずつと後れました。プラターヌの木などはまだ冬枯其のまゝです。漸くマロニエ(二)の芽がポツ〳〵ふくらんで來たところです。しかし日は餘程長くなりました。空も明るく成つて來ました。もはや煖爐なしに暮せます。一雨毎に私共は春の來るのを感じます。あらゆる草木が生返る中で、やがて來る若葉の世界を待つのも樂みです。あの白い蠟燭を立てたやうなマロニエの花が若葉の間に咲いて、冷たい硝子窓からも、石の壁からも、春の焰が流れて來るやうな日は最早遠くは無いでせう。

(一)Léon Daudet. 文豪アルフォンス・ドーデーの子。現在の記者。

言草

さう言へば、燕のかはりに獨逸の飛行船が飛んで來ました。レオン・ドーデーの言草では無いが、あの『空中の海賊』が巴里の市中と市外とに爆彈を落して行つたのは、三月二十三日の夜でした。損害も大した事は無かつたと言ひます。實は私などはそれを知らずに熟睡して居た位です。「あの昨夜の騷を知つて居るか。敵の飛行船を目がけて擊つた深夜の砲聲を聞いたか。」と人に言はれて、始めてさうかと知つた位です。「なぜ獨逸軍はあんな詰らないことをするのか。」かう人々は言ひあひました。「恐らく獨逸軍はそれを何等かの政略に供し、新聞紙上に吹聽し、漸く戰爭に疲れ

て來た國内の不平の聲を沈めようとするのであらう。」かう言ふ人もありました。翌日二十四日には、町々の警戒は一層嚴しくなり、あらゆる街路の燈火も消されました。そよ〳〵とした南風が吹いて來るやうな夕方でした。淡い新月の光も空にありました。點燈頃にはや窓を閉めるのは惜しい氣が致しました。其の晩は床に就いてから、けたゝましい物の音に眼を覺しました。自動車で飛ぶ警戒の喇叭が、深夜の町々を驅けめぐりました。翌朝に成つて、また敵の飛行船が近づいた事を知りましたが、佛蘭西側の飛行機の迎へ襲ふのに逢つて、其の晩は巴里までは來られなけたゝましい

かつたとの事でした。今は巴里も一時のやうに、包圍されかゝつた位置でなし、市は出來るだけの警戒を怠らないし、露西亞の戰報は墺太利方面の勝利を傳へて居る際です。獨逸のツェッペリン(一)が襲つて來たと言つても、他で聞き、電報で傳へらるゝ程の騷でもない事を申し上げたいと思ひます。七時の夕飯時が來ました。今一回斯の御便を書足したいと思ひますが、今日はこれで筆をとめます。

三月二十六日(二)

(一) Zeppelin.

(二) 大正四年。

(一)第十五代德川慶喜。
(二)(三)共に山城國紀伊郡。明治元年幕軍此に官軍と戰ふ。

恭順

二七　幕末論　其の一

福地源一郎

前將軍家は勢に迫られて、(一)伏見、(二)鳥羽(三)の戰を開くに及びたれども、戰亂は素より其の志にあらざりしかば、恭順謹愼の念は、已に大阪城を出でたる時よりして定まりたるものか。但し伏見、鳥羽の戰に、幕兵が散散に擊破られて退きたること、實に天運の然らしめし所なりとはいへ、抑〻出兵の策宜しきを得ざりしによるものと言はざるべからず。

此の時に當り、京都に在りける薩長の兵は慓悍なりといへども、僅かに數千に過ぎず。討幕の密勅は薩長の臍を固めしめたりと雖も、他の諸藩は依違の間に在り。幕府依然として大阪に據りて自重し、海には其の軍艦を攝海に繫ぎて、西南よりする通路を塞ぎ、陸には兵庫の關門を鎖し、淀川の水路を阨し、(一)山崎其の他の要所に護兵を配付して、以て諸方の連絡を斷たば、京都は宛然敵圍の中に在るが如き形勢となり、薩長の懸軍は死地に陷り、戰はずして自ら潰ゆべかりしなり。是を幕府の爲の上策なりとす。然れども勅使頻りに降りて、前將軍家の上京を促され、之を推辭すること能はざりしとならば、前將軍家は斷然汽船に投じて東歸せられ、大阪城の留守を會桑(二)(三)に託して、

臍を固む
依違

(一)山城國乙訓郡。

懸軍

推辭

(二)岩國會津藩。
(三)伊勢國桑名藩。

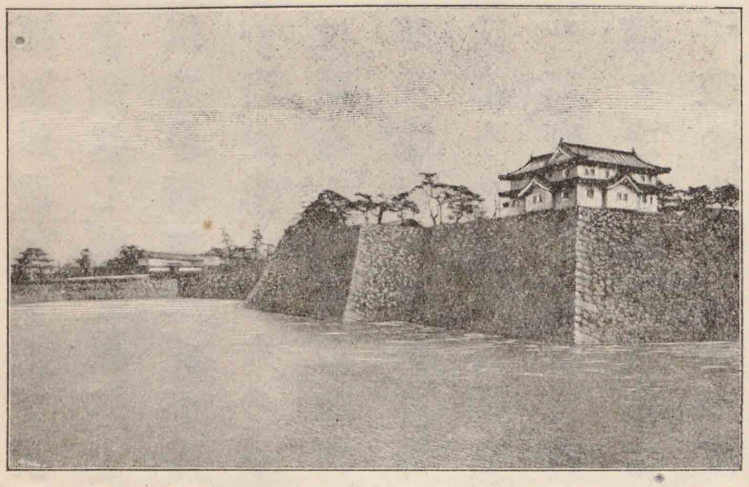
君側を清む

皷譟

前策を行はしめらるべかりしなり。是を中策なりとす。此の両策とも行ふべからずして、必ず京都に攻上りて、以て一戰に薩長の兵を破り、君側を清むべかりしならば、全軍の力を集めて、一擧直ちに山崎街道に向ひ、皷譟して京都を突くの策ありしのみ。是を下策なりとす。彼の狹隘の路に向つて兵を分配し、側面の攻撃を意とせず、加ふるに數隻の軍艦を有し、海軍に於ては全國中幕府に敵すべき諸藩無き好地位に在りながら、かゝる無策の軍畧を行ひたること、苟くも兵を談ずる者は、必ず幕府の爲に奇怪の思をなす所なりとす。當時幕府の將校中、豈此の觀易き兵理を知

大旆

靡然



る者なからんや。

然り而して其の言の行はれずして、彼の無策の出兵に歸したるものは何ぞや。他なし、幕府が恃むべからざるを恃みたるが故なるのみ。幕府の當路者おもへらく、「薩長の兵數千、敢へて恐るゝに足らず。前將軍家の大旆一たび京都に向はゞ、他の諸藩は靡然として幕府に隨從し、薩長の

戈を倒にす

公言して憚らず

孤軍は戰はずして潰散すべし。在京の諸藩も亦皆戈を倒にし、銃を後にして、背後より薩長の兵を攻擊し、以て幕府に應ずべし。砲聲一たび伏見、鳥羽に聞えんか、洛中處々に火の手上りて、敵は前後挾擊を受くるに至らん。兵畧の如何は敢へて問ふを要せず」と。現に幕府諸老は、出兵の方畧を論じたる將校に向つて、往往之を公言して憚らざりき。蓋し京都内應の事は、之を幕府に内議して密約せる輩ありしを以て、幕府は輕々之を信じたる事とは知られたり。若し幕府にして、彼の上策を採つて徐に大阪城に自重せば、維新の功業はしかく容易に其の績を見難かりしならんか。

主戰
(一)伊豆、相模、駿河三國の界。
(二)上野、信濃兩國の界。

逆覩し難し

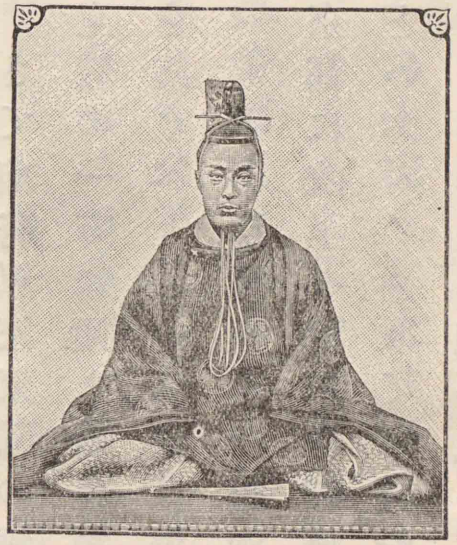
二八　幕末論　其の二

さて前將軍家東歸の後、幕府文武の議論は概ね皆主戰の一方に傾き、或は箱根(一)、碓氷(二)の險に據つて官軍を防ぐべしといひ、或は濃尾の間に兵を進めて戰ふべしといひ、或は再び東海東山の両道より大擧して京都に攻上り、海軍と相應じて大阪城を回復すべしといふものありて、軍議紛々たりき。然るに、前將軍家が固く恭順の議を執りて動き給はざりしが故に、幕議は遂に謝罪降伏とは決したりき。此の時に際し、若し幕軍防戰と決したらんには、勝敗の決逆覩し難く、

蒼生塗炭に苦しむ

隨つて其の戰亂は延いて數年に亙り、全國の蒼生必ず塗炭に苦しみしならん。

しかのみならず、當時最も恐るべかりしは、外國の干渉なりき。佛帝那破崙(一)第三世漸く東西に志ありしが、之を交趾に試み、之を墨西哥に試みて、其の意の如くならざりし折からといひ、加ふるに、當時前將軍家の弟民部大輔佛國に在りて大いに帝の優待を得たりしかば、幕府の士大夫中には、ひそか



徳川慶喜

(一) Napoleon III. (西暦一八〇八—一八七八) 東西に志あり

(二) 德川昭武。慶應三年巴里博覽會に派遣せられたり。

金甌不測の禍源

に佛國の應援に依賴し、其の兵力を假りて以て薩長其の他を平定するの議を首唱して、幾分の勢力を占めんとするに至れる者もありしをや。若し果して此の議にして行はれたらんには、日本帝國の金甌は、ために永く一闕を生じて、不測の禍源たるべかりしなり。

然るに前將軍家は斷乎としてかゝる邪議を却け、ひたすらに恭順を表して動き給はざりき。其の一身の生命を犧牲にし、また德川氏の存在を犧牲にして、專ら國家の幸福と國民の安寧とを望まれたるは、決して尋常の思想に非ること知るべきなり。然らば則

終を全くす

叛立

社稷を犧牲にす

ち前將軍家は、德川氏滅亡の際に臨みて、能く其の終を全くせしめたる明將軍なりといふべきにあらずや。

嗚呼、源頼朝が始めて幕府を叛立せしより七百年、其の間、武門にして政權を掌握して天下を治めたるもの、曰く源氏、曰く北條氏、曰く足利氏、曰く織田氏、曰く豐臣氏、曰く德川氏。而して其の滅亡の時に於ても、國家の爲に、國民の爲に、其の社稷を犧牲にしたるものはひとり德川氏あるのみ。如何ぞ特筆せざる可けんや。

―幕府衰亡論―

扇頭の小景

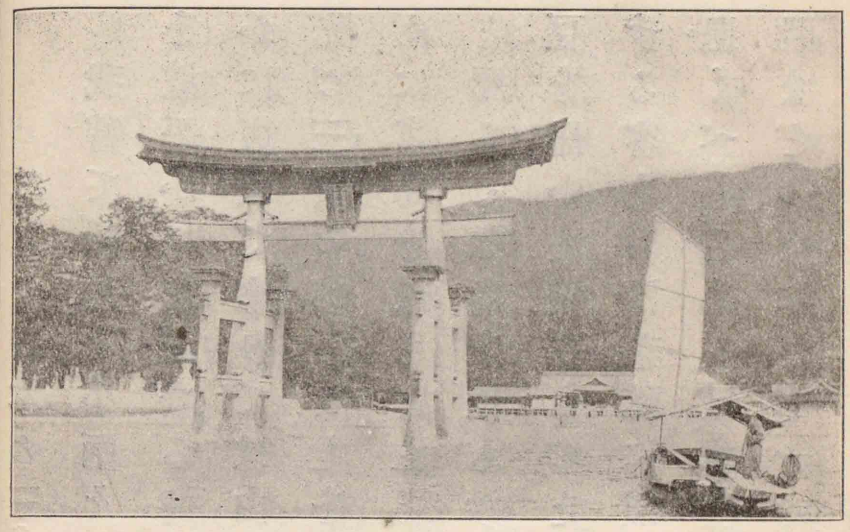
二九　日本の三景

幸田露伴

我嘗て松島を小雨そぼ降り微風吹く日に觀、嚴島を波平かに日麗なる時觀、また薄雲去つては天明らかに、復出で來りては山樹煙る日橋立を一覽し畢へ、先づ三景のあらましを知りたれば、試みに之を評せんに、宮島を最もよしといふ者あらば、我扇頭の小景と罵らん。松島を最も妙と誇る人あらば、高が塗盆に豆を撒いた樣なものと嘲らん。天橋を最も美しと稱する客あらば、茶碗に黑もじ落したも同然と笑つて退くべし。さあらば、木曾の山路の景、中國瀨戸內海の眺などの中に、日本一のものあるかと問はゞ、詰らぬ

一氣に呵す

山峙水流



嚴島

問かなと一氣に呵して斥くべく、畢竟三景皆佳なれども、甲乙の位附はするが野暮なるべし。況や山峙水流の地の美は、無限の變化ある天の美に及ぶべくもあらず。紅霞、白雲、夕陽、明月、電閃、雪飛の天の美は、無心の小兒の空より齎す花の笑顔、仁義につくす大丈夫が、同胞のため澆ぐ珠涙の

品山評水

錦心繡腸
筆下生花

風流魔

山水神靈に負く

美なるに較ぶべくもあらぬに、何とて、小さき日本の中の三景なんどの優劣上下を、事おもく〳〵しく語るに足らんや。彫蟲篆刻も壯夫は之を屑しとせず、品山評水得々たるは、男兒の私かに耻づべきところなり。古今、錦心繡腸の客、筆下生花の才を抱いて、一生一萬八千日、枉げて山水のために注脚を作るごときは、唾して棄つべき風流魔ならん。

人の人にして山水を詠ぜば、固より不可なし。山水の臣にして山水を詠ぜば、山水神靈に佞するの小人、醜厭ふべく、陋賤しむべし。優劣上下を談ずる如きは、山水神靈に負くもまた鮮しとなさず。山水はたゞ觀

たるがよし。詩も無く、歌も無く、理窟も無く、たゞ觀たるがよし。たゞ觀てたゞ樂しまば、風流は足れり。橋立は「きよし」、松島は「うるはし」、宮島は「やすらか」といふ位に一言し置きて、我は口を噤まん。餘りに人の優劣耳朶に觸れしまゝ、おもはず理窟屋になりて、大俗に墮しける我あさまし。

—枕頭山水—

口を噤む
耳朶に觸る
大俗に墮す

三〇　國語と國文

國語は開闢以來の國語なり。素盞嗚尊も、神武天皇も、聖德太子も皆國語にて歌作りし給へり。柿本人麿、山部赤人、大伴家持等の作れる歌も、在原業平、小野小

(一)持統、文武天皇頃の歌人。
(二)聖武天皇頃の歌人。
(三)歌人。延暦四年(一四四五)歿。
(四)歌人。元慶元年(一五四〇)歿。
(五)平安朝の初の頃の歌人。

町、紀貫之、源實朝等の作れる歌も、皆等しく國語なり。源氏物語も、徒然草も、太平記も、八犬傳も、謠も、淨瑠璃も、話し家の話す落語も、講談師の語る講談も、皆ひとしく國語なり。三千年來國語にて話されたるもの、積りて我が國文學を成せり。

國語には變遷あり。上代の國語は今日の人に理解し易からず、古人再び今の世に生るとも、今日の國語は會得し難かるべし。用語に變化あり、文法にも多少の相違あればなり。されど根本の構造に於ては相違なく、日本語はあくまでも日本語なり。衣食住の習慣、風俗、世とともに變化すれども、日本人はいつまでも

會得す

(一)歌人。天慶九年(一六〇二)歿。

促音
拗音
梵語
やまと詞

日本人なるが如し。

上代の國語はやはらかにして母音に富めり。促音なく、拗音なく、語の首に濁音なく、又ラ行の音なし。漢學、佛法日本に傳はり、漢語又は梵語より入來れる單語多くなりて、音韻より見ても多少の變化あり。詞のいひあらはし方にも種々の變化を生ぜり。昔の儘の日本語をやまと詞、みやび詞などともいへり。奈良時代、平安時代の和歌はおほむねやまと詞にて詠まれしなり。

鎌倉時代より足利時代にかけて、漢文の語も句調も交りて、和漢混合文となり、德川時代には漢學流行

懸隔

の世なりしかば、漢文に學ぶことといよ〳〵多く、今の世の文語文は即ち和漢混合文たり。

平安時代までは、言と文との間にさまでの相違は無かりき。漢語の入交れる和漢混合文の發達せる時代、一般の國語は文學上の語と離れ行はれて今日に至り、口語と文語との間に著しき懸隔を生じたり。明治の御代に至りて、口語其の儘を綴りて文をなす事大いに盛になりしは、最も喜ぶべき事なり。

我等國語を學ぶは日常の便利の爲のみに非ず、國語の上に殘されたる我等祖先の思想を知らんが爲なり。されば現代の口語文、文語文を自由に書き自在

要素

に綴るは勿論、古代の國語にも遡りて、之を理解するまでに習熟せざるべからず。古代の國語にも習熟するは、これ我等が祖先の思想を知り、我が國家の歴史を知る所以なればなり。

世界の各國皆其の國語を重んぜざるは無し。國語は國民團結の一要素なればなり。我等の漢文を學び、英語を學ぶは、廣く知識を世界に求むるの趣旨に外ならず。かちく、山、桃太郎のお伽噺より、いろは短歌、百人一首、年とともに進める讀書力には、八犬傳も、淨瑠璃も、柿本人麿の歌も、源氏物語も、皆讀みて理解し得べし。國語に習熟し行くは、日一日と日本國民たる資格の添はり行くものといふべし。

自讀文

一　我が幼時

新井白石

我が幼き時、上野物語といふ草紙ありけり。これは、(一)寛永寺の花見に人の群來る事どもを記せるなり。我が三歳の春の頃、火燵に足をさして腹這ひ居て、其の草紙を見ながら、筆紙を求めて透寫しけるを、母人の見給ひて、十の中一二はまことの文字もありければ、我が父(二)に見せ參らせられしを、父の友人の來り見しより、人々も聞傳へて、其の寫しゝ物どもを取傳へて、めではやしたりき。

其の後は常の戯に筆執りて、物書く事のみをしければ、おのづから日々に文字をも見知りたれど、物讀む師友とすべき人なかりしかば、只往來物の類などを讀習ふのみなりき。戸部(三)の家人に、富田とて生國は加賀の國の人と聞えしが、太平記評判(四)といふ書を傳へて、其の事を講ずるあり。夜々に我が父など寄りあ

(一)東京市上野公園内。東叡山と號す。關東天台宗總本山。

(二)正濟。

往來物　手紙の文案などをあつめた書物。

(三)上總國久留里の藩主土屋民部少輔利直。戸部は民部省の唐名。

(四)五十卷、和田助則の作。

ひつゝ、それを聽聞せられしが、我が四五歳の時、常に其の座に侍りけるに、夜いたく更けぬれど、終に座を起ちしこともなく、講じ畢りぬれば、其の義を請問ふことなどもありしを、人々「奇特のことなり。」といひあへりき。

六歳の夏の頃、上松といふ人の、少しは文字などありけるが、七言絶句の詩三首まで敎へて、其の意を解きかせられつるに、やがて誦を成して、そを人にも吟じ聞かせたりき。「此の兒、才あり。いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。」など、かの人もいひしかど、頑なる昔人等のいひしは、「昔より、『利根、氣根、黄金の三こん無くては、學匠になり難し。』といふなり。此の兒、利根にこそ生れつきたらめ、猶幼くして、其の氣根の程も測り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事も心得られず。」などいひあへりしに、我が父も、戸部の御いつくしみ深く、常に御側を離し給はねば、學に入れ師に從はしめんことも協ふべからず。されど彼の幼きより物書くことをば、人々に語り誇らせ給へるなれば、せめては物書きならふ事のみは、せさせたきものなりとて、我が八歳の秋、戸部の上總の國に往き給ひし後に、手習ふことを敎へられたり。其の冬の十二月に、戸部歸り給ひしかば、常に傍に侍ふこと舊の如く、明年の秋また國に往き給ひし後にて、課を立てられて、「日の中には行草の字三千字、夜に入りて一千字を限りて書出すべし。」と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課いまだ滿たざるに日暮れんとすること度々にて、西向なる竹緣の上に机を持出でて、書終へぬることもあり。又夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へがたきに、我に附けられたる者と窃に謀りて、水二桶づつかの竹緣に汲置き、いたく睡の催しぬれば、衣脱捨てゝ、まづ一桶の水をかぶりて習ふに、一時は其の冷なるに目覺むる心ちすれど、しばし程經ぬれば、身暖になりて復も睡くなりぬ。また水をかぶること前の如くして、二たび水をかぶりぬる程には、大やうは課をも充てたりき。これ我が九歳の秋、冬の間の事なり。

かゝりし程に、此の頃よりは、我が父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたりき。十一歳の秋また課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月

七言絶句　七字を一句とし、これを四句並べた詩體で、其の暗記したのは、三傳市虎人皆從」といふ詩と、朝鮮七歳の兒の太閤の前で作つた詩と、自體藏主と江島で作つた詩である。

利根氣根黄金智惠、精力、財産。

(一)玄慧法印の作といふ。十二月往復の書簡文。

に至りて、「十日の内に淨寫してまゐらすべし。」と命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へつれば、冊になして戸部に見せまゐらするに、褒めたまふこと大方ならざりき。十三の時よりは、戸部の人と贈答したまふ程の文ども、大方は我に命せられき。

淨寫　清書。

又十一歳の時に、我が父の友なる關某の子は、太刀打の技に勝れて、人に敎ふることありしを、我にも此の技敎へられんことを望みしに、「わぬしいまだ幼し。これらの技學ばんこと早かり。」といふ。「さこそは侍るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀、脇差腰にせんこと不用のことにや。」といひしかば、「其のいふところ、實にことわりなり。」とて、一つの技を傳へて、習はしめられたり。

わぬし　お前。

ことわり　もつとも。

かゝりし程に、其の年十六になれる者の、我と藝を試みんといひしかば、木刀を取りて三度合ひて、三度まで勝つことを得たりき。其の後は、常にかゝる武藝のことどもをこのみて、手習ふことなど心にも染めずありしかど、物讀むことは好みければ、我が國の物語、草紙などの類をば、殆ど見盡せり。

――折たく柴の記――

二　太宰府詣

幸田露伴

朝まだき、船にて博多に渡る。(一)宮崎(二)の八幡宮に詣でんとて、濱傳ひに十餘町ばかり、松影翠に沙遠白き間を辿りて行く。八幡宮は海に向ひて鎮座あり。煙波渺茫として、遙に朝鮮、支那と連る。金字眩く「敵國降伏。」と讀まるゝ醍醐帝の宸筆を摹寫し奉れる額のかゝれる、かと畏し。三拜して博多の町に歸る。

朝まだき　朝早く。

(一)福岡市内。

(二)官幣中社。應神天皇、神功皇后、玉依比賣を祀る。

翌日の朝、十時二十分の汽車に搭じて二(三)日市に着す。濛々と煙る雨を冒して直ちに太宰府(四)に到るに、府中の町名に梅大路などいへるがあるにも、はや往時忍ばしくて、懷舊の情に禁へず。畫餉たぶべく豫め定めたる家に行李あづけ置きて、菅公廟に詣でけるが、廟はもとより丹碧金銀を施さざる素樸のものなるが上に、星霜を經たれば、いと神さびて、何となく崇くおぼえられ、二つの太鼓橋の高く架せる、神池の曲りて靜に水を湛へたる、皆景致あるに、殊更雨の霏々と降れれば、さびたる廻廊、古き梅の樹、苔むせる捨石などの濡色ひとしほ面白く、廟後に數ある小祠の我等が歩むにつれて隱見し、小さき瀑布の常には增して

(三)筑前筑紫郡。福岡市の南。

(四)太宰府址、天滿宮の西南十餘町。

景致　おもむき。

霏々　しと〳〵。

と覺しく、勢よく落つるもまた興あり。池邊に蔭暗きまで生ひ茂りたる大樹あるを、友は指さして、「此の樹必ず蒙古事件を傍觀せしなるべし。」と評しけり。

晝餉を終へし後、菅公の生涯を俗人の説くものの必ず稱する天拜山を、模糊たる雨中に望みながら宰府を出でしが、現存せる米屋といへる藥舗を指さして、「此の家こそ菅公時代よりの舊家なれ。當時此の地には三戸より多くは民家無かりしが、左遷せられ給ひて、菅公此の地に來ませしとき、今の主人より五十三代前の此の家の主人、いとよくいたはりかしづきまゐらせし。」とぞ人の教へくれぬ。果して實なりや否やは知らず。

宰府、二日市の間の路傍には櫨の木多く、大抵皆藁繩もて枝を其の幹に縛りつけ、實の熟するにつれて重さの增すとも、枝の折るゝ事なきやうに備へたり。我は蠟を得べき樹を精しく知らざりしかば、爲さでもあるべき事をしたるかなと怪しみけるが、問ふに及びて始めて覺り、序をもつて其の實の價を尋ねけるに、「實は一斤にて壹錢五厘乃至貳錢五厘ほどなり。」と、樹蔭に佇める者の答へぬ。二時三十分二日市に着きければ、同五十分發の汽車に乘りて、三時四十五分

(一)山上に肥前の荒穗神を祀る。

に久留米に着し、路傍にて絣織るため經絲を整ふるを見、屋裏にてとんはたりと機の音するを聞捨て、雨の霽れしを幸ひ羽犬塚といふ所まで步みぬ。昨日は博多の町にて始めて螢を見、今宵は此の地にて始めて蚊帳の內に臥しけり。

後に思へば、筑前に櫨樹多くして人民其の益を受くるは、筑紫郡山田村の人高橋善藏といふものの遺澤にして、善藏は貞享元年に生れ、寶曆九年に死せしが、享保年間に櫨の實の効益あるを聞き、自ら薩摩、肥後に赴き、栽植培養の法を學び得て、歸家の後試み作りしに、果して利益多かりければ、斷然畑作を改めて櫨樹を栽培しけり。定まりたる利ある畑作を改めて、眼慣れぬ櫨樹をば植ゑたるを見て、村民等は初こそ嘲り笑ひたれ、後には其の利多きを知りて、倣ひ植うるに至りしより、遂に今日あるを致したりとぞ。又善藏は死に臨める時、「我が亡き後の記標には、石もて碑を設け、木もて卒塔婆を建つるに及ばず。たゞ櫨の樹を塚の上に植置きくるれば願足れり。我が一生の精神は櫨の樹に籠れるなれば。」と遺言しけるよし、心を存すること篤くして、いと殊勝なる者といふべし。

——枕頭山水——

(一)筑後川の下流に沿へる都會。九州鐵道の幹線に當る。舊有馬藩の城下。久留米絣の產最も有名。
(二)久留米市の南四里。
(三)二三四年。
(四)二四一九年。
(五)二三七六—二三五九。中御門天皇の御代。

精神的生活　物質的生活

心のはたらきと、體のはたらき。

(一)Brussels　白耳義國の首府。

危惧　おそれ。

三　鍵の國と障子の國

河上肇

西洋人の精神的乃至物質的生活を何かに纏めて、掌の上に載せて見せよと註文をされたならば、私は鍵を出して示さうと思ふ。始めてブリュッセル(一)の素人下宿に入つた時、定められた自分の部屋を見廻して、私は鍵の多いのに驚いた。戸を開けて室に入ると、其の戸を内から閉ぢる爲に鍵がある。北側に窓がある、其の窓に又鍵がある。一度是等の鍵を下したならば、誰も私の部屋にはいつて來られぬ事になつて居る。

是等の鍵を見て、道理からいへば、私は安心すべきであらうが、實際は寧ろ淡い不安と淺い危惧に襲はれた。戸棚がある。勿論戸に錠があり、抽斗に鍵がある。洗面臺の下に、四段の抽斗がある。一々それに鍵が拵へてある。机にも抽斗がある。それにも亦鍵が拵へてある。凡そ開閉の出來るものに、特別の裝置の無いものは全く無いのである。郵便を一つ入れに出る。歸る時には、必ず鍵を出して錠を脱さぬと、家の大戸は開かぬのである。夜になると、其の大戸に内から錠を下す。鍵がなくては外からはどうせ開かぬ戸であるが、猶用心のために更に錠を下すのだと見える。錠が下りた後は、外から鍵を入れて、一回半廻さぬと戸は開かぬ。鍵の生活に慣れぬ私は、此の大戸の鍵の用法に就いて、容易に要領を得ないので、暫くまごついた。同宿のT君は嘗て鍵を忘れて、遂に一夜をホテルで過されたる事があるといふ。

要領を得ないのみこめない。

巴里に來て始めて西洋の旅館に宿つた。私の部屋は戸を閉めると、鍵がなければ外からは開けられぬ。それにも拘らず、内から又錠を下す爲に、別の鍵が備へ付けてあつた。

只今の宿はS君の向隣であつて、同君が讀書の燈は、窓から坐りながら見られるが、しかも同君の部屋を尋ねる爲には、錠の下りる戸を四度通らねばならぬ。白晝に尋ねても、一度は鈴を鳴らして、内から戸を開けて貰はねば、同君の部屋の戸を敲く譯には行かぬ。

私はブリュッセルと巴里を見ただけであるから、俄に斷言は出來ぬが、恐らく西洋諸國に於ける鍵の數は、人口の幾倍かに當つて居るだらうと思ふ。聞く

所によれば、此の巴里市の各停車場で下車乘車する者、日々三十三萬人、地下鐵道に乘る者、日に百七十萬人といふが、假に是等の人々が五箇づつの鍵をもつて居るとしても、此の巴里市だけで、一日約一千萬の鍵が汽車に乘降りする筈である。其の外電車に乘り、自動車に乘り、馬車に乘り、乃至は靴に乘つて歩いて居る鍵を數へ上げたならば、往來して居る鍵だけでも、恐らく半億に達するであらう。實に西洋は鍵の世界である。

西洋は個人主義の國である。それ故部屋を固めるのに厚い煉瓦の壁を以てし、出口に重い戸を設け、戸に丈夫な錠を下し、蟄居する時は敢へて之を窺ふを得ざらしめて居る。

如何に親しい間柄の者でも、他人の室に入るには、先づ戸を敲く。すると、内に居る人が「入れ。」と應ずる。例へば佛蘭西では「アントレー」(一)といふ。其の「アントレー」の聲を聞くまでは、今鈴をならして呼んだ下女と雖も、決して其の戸を開けぬのである。

此の地に在つて遠く日本を顧れば、日本は實に家族主義の國である。而して

個人主義　各個人の自由を尙び權利を張らうとする思想。

蟄居　内にひつこんでゐること。

(一) Entrer.

家族主義　一人の家長の下に一家族一團として働く思想。

日本の家族主義が、西洋の個人主義と恐ろしい差異を有するが如くに、日本人の住居の樣は、恐ろしく西洋人のそれと相違して居る。錠を下した重い戸の代りに、日本では紙一枚の障子で部屋を圍んで居る。出入自在である。共同主義である。たとひ一軒の家が五間になつて居ようと、十間になつて居ようと、實は一間の家である。五間六間乃至數十間の室が離れる如く即くが如くにしても、茫然漠然自ら一室を成してゐるのが、日本の家である。此の「家」は實に日本獨特のものである。夫婦はじめ家族一般相倚り、相信じて一體をなし、其の間一點の秘密をも存せざる所が、日本の「家族」の精神である。

此の精神を建築で現せば、即ち日本流の家屋になる。錠を下した戸の代りに、紙で張つた障子になる。西洋にも日本流の家屋は造り得られる。併し例へば此の巴里の眞中に、さやうな家を造つて見ても、之に住み得る巴里人が居ない。西洋人は室をもつて居る。しかし西洋には家が無い。家をもつて居るのは、世界中唯日本人だけである。少くとも今日の文明國に於ては。

――祖國を顧みて――

(一)有名なる新聞記者。史論家。大正六年歿。
(二)明治三十七年。
疋なめて　馬の頭を並べて。
青春　青年。
(三)滿洲盛京省金州附近。旅順攻圍戰の前ここに日露両軍激戰す。
武運　軍人としての運。
かげろひ　朝生れて晩に死ぬ蟲。

四　乃木將軍旅順攻

山路愛山(一)

(一)　勝典戰死

乃木希典は第三軍に長として、子規なくや五月(二)のさみだれに、若殿原と駒なめて、遠征の途に上りけり。

其の遠征の途にして、長男中尉勝典は、二十を過ぎて六歲の、身は青春の血にもゆる若き士官のはかなくも、五月の二十六日に、かの南山(三)に戰ひて、父が子なれば勇ましく、善く其の職に堪へたれど、武運つたなく傷重く、つひに歸らぬ旅に行く。はかなきは實に、かげろひの人の命ぞ。

さりながら掌中の珠を失ひし希典すこしも悲しまず。戰場にして死ぬるのは、君に命を獻げたる日本男兒の習なり。勝典名譽の戰死して、かくいふ吾は滿足す。委細は文に知らせん。」と電報用紙に筆染めて、泣かぬは泣くにまさりたる胸中無限の感情を、短き文字につゞめつゝ、妻なる人に言遺りつゝやがて戰地に上陸し、旅順の城に攻寄せぬ。

天險　天然にけはしい地。
難攻不落　せめがたく落しがたい。
金城鐵壁　金や鐵で堅く作つた城。
(一)旅順口港内にかくれた敵艦。
(二)歐洲から東洋へ廻された露國のバルチック艦隊。
犬死　むだじに。

(二)　旅順攻擊

天險にして人工の粹を集めし旅順城、是や難攻不落てふ極東一の堅砦ぞ。それに籠りしつはものは、要塞守る兵として、世界無雙の手練ある露西亞の勇士四萬人、此所を生命の瀨戸ぞとて、油斷なくこそ守りけれ。されば世界の評判に、日本いかに强くとも、よも此の城は落つまじと、いはぬ者こそ無かりけれ。

此の難局ははじめより、覺悟の前の事なれば、たとへ金城鐵壁に鬼籠るとも、日本の死ぬを恐れぬ軍人に、切所は無きぞたゞ進め。旅順落ちずば日本に、眞の勝はなきぞとよ。眞の勝のあらざれば、國の命の危きぞ。必ず落せ、落さずば、旅順(一)艦隊亡びずに、第二(二)の東洋艦隊と合ふことあらんさる時は我が勇ましき戰友は、後を絶たれ、滿洲の荒野に飢うることあらん。されば必ず落すべし。旅順落ちずば、帝國の安危存亡はかられず。命なりけり旅順城。こゝに死なんは、國守る我が武夫の務なり。ゆめ犬死にあらざれば、必ず進め。我が肉と我が血を以て、此の城を必ず落せ、殿原よ。我も死なん。」と、希典は大將の身の自重せず、其の老顏を幾たびも、敵彈落つる戰線に、現しながらはげましぬ。されど露兵も强くして、容易

く落つる氣色なし。攻めあぐみたる日本軍、弓張月の氣は張りて、心はいつも勇めども、敵壘高くよぢ難く、困じ果てゝぞ見えにける。

かくて旅順の落ちざるに、露國の第二艦隊は、日々に近づき來りけり。たゞ此の上は血の海や、屍の山を積むとても、いそぎて落せ。落さねば國の命ぞ、殿原よ。

げに七尺の屏風さへ、躍らばなどか越えざらん。命を國に獻げよ。」と、猛將勇士の氣をいらち、たゞひたすらに攻めければ、戰死の武夫も多くして、其の霜月の十餘り一日といふに、勝典の弟なりける保典も、爾靈山下に失せにけり。愛子二人が戰場の露と消えたる悲みも、忠義の爲に思ひかへ、「軍人の習ひなれば、人の子多く死なせたる我にしあれば、いとし子の死にたるは、げにせめてもの心やりぞ。」と、健氣にも言放ちたる希典が心すゞしきさまを見て、「あはれ吾が此の大將のためならば、必ず死なん、死すべし。」と思はぬ者ぞなかりける。

さしもに強き旅順城、科學の智慧と大國の富を集めて、凝成せる金城湯池なりけれど、科學も富も、忠孝の義に勇みたる精神の、其の通路をせきかねて、靈の力に物質の力はつひに勝たずして、敵の要地と頼みたる爾靈の山も、遂に我が

(一)「七尺の屏風は躍らば越えつべし。羅穀の袂をも引かばなどか切れざらん。」（謠曲、咸陽宮）

(二)旅順二〇三高地の要塞。

(三)「王師百萬征ニ強虜ヲ。攻城野戰屍成ル山。愧我何顏看ニ父老ヲ。凱歌今日幾人還。」（乃木大將）

金城湯地　金のやうに丈夫な城、熱くて近づけない堀。つまり堅城の意。

ものとなりけり。それよりは我が猛烈の砲擊に、旅順艦隊先づ亡び、敵の守將も開城し、我が軍門に降りけり。

希典かくて名譽ある戰勝の將軍となりけれど、子を失ひし親心、胸にたゝみし悲さを、いはぬはいふに增鏡、曇らぬ空もおのづから、「山川草木さみしくて、十里の戰場風寒く、馬は進まず人默し、金州城外の夕陽に立つ。」と歌ひしからうた に、千々の思を籠めにけり。

——琵琶歌、乃木大將——

(一)「山川草木轉ヲ荒涼。十里風腥新戰場。征馬不レ進人不レ語。金州城外立ニ夕陽ニ。」（乃木大將）

からうた　漢詩。

五　其の時のことはさ加減

福澤諭吉(二)

維新前文久三四年頃、江戸深川六軒堀に、藤澤志摩守といふ旗本があつた。是は時の陸軍の將官を勤め、極の西洋家で、或日其の人の家に集會を催し、客は成島柳北をはじめ、其の外當時の蘭學醫者、私ども合して七八名でした。其の時の一體の事情を申せば、私は十二三年間も夜分外出しないといふ時分で、自ら戒めて、内々刀の切味にも心を用ひて居たので、敢へてこれを頼みにするではないが、集會の話が面白く、怖い事を忘れて、思はず夜を更し、十二時にもなつた所

(二)明治の大教育家。豐前中津の人。明治三十四年歿。年六十八。西洋家　西洋文物の研究者。

(三)舊幕府の儒者。明治初年に新聞記者として大いに著れた人。蘭學醫者　和蘭の醫學を修めた學者。

で、座中みな氣がついて、さあ歸りが怖い。疵持つ身といふではないが、いづれも洋學臭い連中だから、皆怖がつて、「大分晩うなつたが、どうだらう。」といふと、主人が氣を利かして、屋根船を用意し、七八人の客を乘せて、六軒堀の河岸から市中の川、即ち堀割を通り、行く〳〵成島は柳橋(一)から上り、これから近いもの近いものと、段々上げて、しまひに、戸塚といふ老醫と私と二人になり、新橋(二)の河岸について、戸塚は麻布に歸り、私は新錢座(三)に歸らねばならぬ。新橋から新錢座まで凡そ十丁もある。時刻ははや一時過、而も其の夜は寒い晩で、冬の月が誠によく照して、何となく物凄い。新橋の河岸へ上つて、大通を通り、新錢座の方へと志して行きながら、四邊を見れば、人は唯の一人も居ない。其の頃は浪人者が徘徊して、其所にも此所にも毎夜のやうに辻斬とて、容易に人を斬ることがあつて、物騷ども何ともいふにいはれぬ。それから袴の股立をとつて、進退に都合の好いやうに趣向して、さつさと歩いて行くと、ちやうど源助町(四)の央あたりと思ふ、向ふから一人やつて來る。其の男は大層大きく見えた。實はどうだか知らぬが、大男に見えた。そりや來た。どうもこれは逃げた所が追ひつかない。どうして騷々し

疵持つ身　古い罪惡をもつてゐる身。

(一)神田川の隅田川に注ぐ所に架けた橋。

(二)京橋區と芝區の間の橋。

(三)芝區。

辻斬　暗夜往來に立つて通る人を斬ること。

(四)芝區。新橋を渡つて新錢座へ行く大通の町名。

い時だから、不意に人の家にはいられるものではない。却つて戸を閉ててしまつて、加勢しようなどといふ者のないのは分りきつてゐる。こりや困つた。今から引つ返すと、却つて引け身になつて、追つかけられる。後からやられる。寧ろ大膽に此方から進むに若かず。進むからには、臆病な風を見せると付上るから、衝當る樣にやらうと決心して、今まで私は往來の左を通つて居たのを、かう斜に道の眞中に出かけると、彼方の奴も斜に出て來た。こりや大變だと思つたが、もう寸歩も後へは引かれぬ。愈〻となれば、豫て少し居合の心得もあるから、どうしてくれようか。これは一つ下から刎ねてやりませうといふ考で、一所懸命、いざといへば本當にやる所存で行くと、先方ものそ〳〵とやつて來る。私は人を斬るといふことは大嫌、見るのも嫌だけれども、逃げれば斬られる、仕方がない。愈〻先方が抜きかゝれば、背に腹は換へられぬ。此方も抜いて先を取らねばならぬ。其の頃は裁判もなければ警察もない。人を斬つたからといつて、咎められもせぬ。只其の場を逃げさへすれば宜しいと覺悟して、段々行くと、一歩一歩近くなつて、どう〳〵すれ違ひになつた所が、先方の奴も抜かぬ。此方は勿論抜かぬ。擦

居合　氣合をかけて刀を自在に抜く術。

違つたから、これを拍子に私はどん〳〵逃げた。五六間さきへ行つて振返つて見ると、其の男もどん〳〵逃げて行く。どうも何ともいはれぬ。實に怖かつたが、双方逃げた跡で、先づほつと息をついて、安心して可笑しかつた。初から此方は斬る氣はない。唯逃げてはまづい。きつと殺されると思つたから進んだ所が、先方もなか〳〵心得て居る。内心こは〴〵ながら、表面はさつさと出て來て、ちやうど抜きさへすれば切先の届く位、すれ〳〵になつた所で、身を飜して逃出したのは誠にえらい。こんな所で殺されるのは眞實の犬死だから。此方も怖かつたが、先方もさぞ〳〵こはかつたらうと思ふ。

——福翁自傳——

時宜次第　其の時の都合次第。

六　西郷南洲遺訓

事大小となく、正道を履み至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦其の差支を通せば、後は時宜次第工夫の出來る樣に思へども、策略の煩きつと生じ、事必ず敗るゝものぞ。正直を以て之を行へば、目前には迂遠なる樣なれども、先に行けば成功は早きものなり。

驕矜　おごりたかぶる。

詮もなき　やくに立たぬ。

身を修むるに克己を以て終始せよ。總じて人は己に克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝものぞ。よく古今の人物を見よ。事業を創起する人、大抵十に七八までは能く成し得れども、殘り二つの終まで成し得る人は稀なり。始はよく己を慎み、事をも敬する故、功も立ち、名も顯るゝなり。功立ち名顯るゝに隨ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼、戒慎の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、其の成し得たる事業を負み、終に敗るゝものにて、皆自ら招くなり。故に己に克ちて、睹ず聞かざる所に戒慎すべきものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。過を改むるに自ら過てりとだに思ひつかば、それにてよし。其の事をば棄てゝ顧ず、直ちに一歩踏出すべし。過を悔しく思ひ、取繕はんとて心配するは、譬へば茶碗をわり、其の闕を集めて合せ見るが如く、詮もなきことなり。

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして、國家の大事は成し得られぬなり。

道を行ふ者は、天下擧つて毀るも足らずとせず、天下擧つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずること厚きが故なり。

天下後世までも、信仰悅服せらるゝものは、唯これ一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人、其の數擧げて數へ難きがなかに、獨り曾我兄弟のみ今に至りて兒童、婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠ならずして譽めらるゝは僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。

今の人、才識あれば事業は心次第に成さるゝものと思へども、才に任せて爲す事は、危くして見て居られぬものぞ。體ありてこそ用は行はるゝなれ。

僥倖（まぐれあたり。）

體 實物。
用 活用

改訂 帝國讀本卷四 終

通用字及び正字對照表

（玆に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
丙	兩	剪	翦	塲	場	戟	戟	楕	橢
仭	仞	劒（劍）	劍	塚	冢	戲	戲	欵	款
佞	佞	効	效	墻	牆	拘	拘	殲	殲
免	免	勺	勺	寃	冤	拿	拏	殺	殺
兎	兔	卑	卑	寇	寇	拔	拔	畫（畫）	畫
円	圓	即	卽	寶	寶	挿	插	氷	冰
冐	冒	厨	廚	尅	剋	捉	捉	涅	涅
決	決	厩	廐	帽	帽	攜（攜）	攜	潤	閏
況	況	双	雙	并	幷	整	整	潛（潛）	潛
准（準）	準	収	收	廩	廩	既	既	焔	焰
凉	涼	叙（敘）	敘	廻（迴）	廻	昂	昂	熔	鎔
減	減	唇	脣	徃	往	晉	晉	猿	猴
凡（凡）	凡	器	器	恒	恆	夷	夷	猪	豬
函	函	噴	噴	慾	慾	朽	朽	猫	貓
刄	刃	囲（回）	圍	懺	懺	杆	杆	献	獻

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
頑	頑	纏	纏	臥	臥	裡	裏	間	閒
秘	祕	罰	罰	致	致	褒	褒	陷	陷
窃	竊	群	羣	皐	皐	覇	霸	賓	賓
竪	豎	羮	羹	舗	鋪	覧	覽	賛	贊
篡	簒	耻	恥	舘	館	解	解	軟	輭
籤	籤	聟（壻）	聟	艶	艷	記	記	隣	鄰
粘	黏	胆	膽	莽	莽	讖	讖	釜	釜
穀	穀	脉	脈	萠	萌	讐	讐	針	鍼
紀	紀	膓	腸	蛩	蛩	象	象	鐵（鐵）	鐵
繊	纖	膝	膝	衛	衛	豹	豹	鎖	鎖

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
万	萬	並（竝）	並	囂	囂	嬶	嬶	庵	菴
冊	冊	冨	富	鬻	鬻	聘	聘	慍	慍
叶	協	嚙	齧	坂	阪	婚	婚	弊	斃
姉	姉	峨	峨	野	野	岳	嶽	奬	奬
嶋	島	強（强）	强	埜	野	弊	斃	慙	慚
忘	忘	慍	慍	京	京	考	考	普	普
恣	恣	侯	俟	勅	勅	亡	亡	冲	沖
傲	傲	厠	廁	妊	妊	峨	峨	廁	厠
村	邨	普	普	孜	孜	嶽	嶽	鬱	鬱

同字表（いづれにてもよし）

隷（隸）	隷	駄	駄	麺	麺	鬪	鬪	鬱	鬱
鶴	鶴								

柿 柹 毘 毗 砧 碪 網 綱 荒 荒 蹦 蹣
案 桉 汙 汚 稿 藁 総 總 蔭 蔭 遁 遯
棊 碁 棋 温 溫 競 競 綵 裸 虱 蝨 鉾 矛
棕 椶 烟 煙 筍 笋 組 縕 衽 袵 銹 鏽 陰 陰
楫 楫 無 无 笄 笄 羈 羇 羈 訛 譌 陰 陰
槁 藁 猪 豬 粽 糉 舩 船 譁 嘩 雁 鴈
概 槩 狸 貍 糺 糾 艪 櫓 谿 溪 雞 鷄
朴 樸 睹 覩 紆 紅 花 華 踪 蹤 駈 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中＊標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

＊亙（クワン）亘　ワタル。「連亘」
桓ニ同ジ。

＊体（タイ）體（ホン）　笨ニ同ジ。アラシ、麁粗。
カラダ。

＊但（シヨウ）但（タン）　タヾシ、タヾ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。

＊僭（センチウ）僭（テツ）　ミダリガハシ、猥。
身分ヲ越エテオゴル。「僭越」

＊冑（チウ）冑（ケツ）　カブト、兜。「甲冑」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

＊協（ケフ）協（ケフ）　カナフ、叶。
オビヤカス、脅。

＊刺（シセキ）刺（ラツ）　サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」

台（タイ）臺（ダイ）　星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ。

＊后（コウ）後（ゴ）　ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。「皇后」

商（シヤウ）商（テキ）　アキナヒ。
モト、本。

壺（コン）壺（コ）　ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。

＊姫（キ）姫（シン）　ツヽシム。
ヒメ。

＊托（タク）托（タク）　拓ニ同ジ。オス、ヒラク。

＊託（タク）託（タツ）　ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

＊担（タン）擔（タン）　ハラフ。又アグ。
ニナフ、カツグ。

改（イ）改（カイ）　鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。

＊槍（サウ）槍（サウ）　ヤリ。
鎗ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。

＊欠（ケン）欠（ケツ）　アクビ。「欠伸」
カク。「缺席」

＊糸（シ）絲（シ）　ホソイト、細絲。
イト。

＊羨（イ）羨（セン）　支那ノ地名。
ウラヤム。

＊虫（キ）蟲（チユウ）　魚介類の總稱。又マムシ。
シム。

＊詫（タ）詫（タイ）　ワビ、ワブ。「詫狀」
詑ニ同ジ。アザムク。

＊詔（テン）謟（タウ）　ヘツラフ。
ウタガフ、疑。

＊證（ショウ）證（セイ）　アカシ、シルシ。「證明」
イサム、諫。

＊豐（レイ）豐（ホウ）　禮ノ古字。
ユタカ。

＊迄（キツ）迄（セフ）　マデ。
ユク、行。

＊選（セン）選（セン）　エラブ。（ヨリトル）

＊撰（セン）撰（セン）　エラブ。（書物ヲ編纂ス）

郤（ゲキ）　ヒマ、隙。
卻（キャク）　ゾリゾク。「退卻」
鍛（タン）　キタノ。「鍛錬」
鍛（カ）　シコロ、鑑。

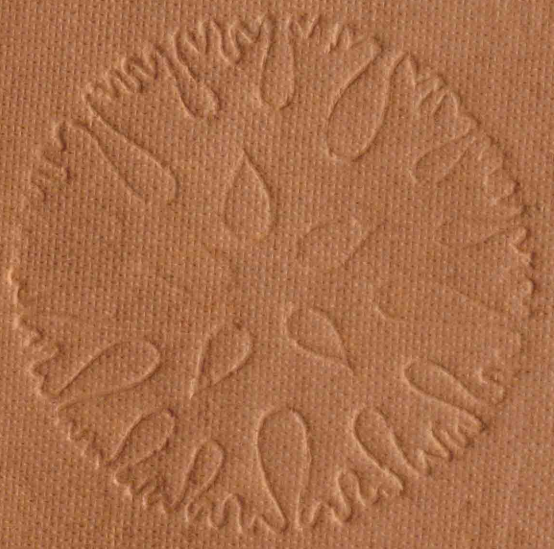
宛字（左の如き字は假名を使用するをよしとす）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、遉
しまふ　仕舞ふ
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄終

大正六年十一月五日印刷
大正七年二月二日發行
大正七年二月五日訂正再版印刷
大正七年十月十一日改訂印刷
大正七年十二月十四日改訂三版發行
大正七年十二月十三日改訂三版印刷

改訂帝國讀本
定價　卷一、二各金參拾八錢　卷三、四各金參拾六錢　自卷五至卷十各金參拾錢

著者　芳賀矢一
東京市神田區裏神保町九番地
發行兼印刷者　合資會社　冨山房
合資會社冨山房社長
代表者　坂本嘉治馬
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　合資會社　電新堂
發行所　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房
長電話本局一〇三六・本局四一三〇番
振替口座東京〇五一番

著作權所有